中山遺跡

発掘調査報告書

第3次

昭和62年度

筑輪町教育委員会

中山遺跡

第3次

昭和62年度

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会
教育長　樋口彦雄

箕輪中学校全面改築工事の進行につれて、既に本遺跡は第一次、第二次の緊急発掘調査を行い報告書をまとめた。

今回は関連工事の最終第三次調査である。中学校の体育学習にも活用できることも考えて、箕輪町社会体育館建築のための緊急発掘調査である。

調査結果は章を追って明らかにするが、南段丘崖に近い所以外は砂礫層であった。発掘調査が中学校の校舎に近いため、中学生の現地学習が多かった。

例　　言

1．本書は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,230番地に所在する中山遺跡の報告書である。

2．本調査は箕輪町教育委員会が実施した。

発掘調査は昭和62年４月５日～４月30日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。

作業分担は次の通りである。

土器の復元－福沢幸一、竹入洋子　遺構実測図の整理－竹入洋子、根橋とし子

土器・石器実測トレース－竹入洋子、根橋とし子　土器拓影－山内志賀子

挿図作製－竹入洋子、根橋とし子　写真図版作製－柴登巳夫

3．本書に掲載した遺構・遺物の写真は柴登巳夫・石川寛が撮影したものを使用した。なお征矢進氏からは撮影の御指導をいただいた。

4．土器・陶器類については小平和夫氏にご教示いただいた。

5．本書の執筆は柴登巳夫が行った。

6．本書の編集は発掘調査団が行った。

7．本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

目　　次

題　字　　教育長　樋口彦雄

序　　教育長　樋口彦雄

例　言

本文目次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章　遺跡の立地……1

第１節　位置……1

第２節　自然環境……2

第３節　歴史的環境……3

第Ⅱ章　調査の経過……5

第１節　発掘調査に至るまで……5

イ、調査の概要……5

ロ、調査団……5

ハ、事務局……6

ニ、調査協力者……6

第２節　調査の概要……7

１．調査日誌……7

第Ⅲ章　遺構と遺物……12

第１節　基本層序……13

第２節　遺　構……14

１．住居址……14

１）第１号住居址……14

２）第２、３号住居址……15

３）第４号住居址……16

４）第５号住居址……18

２．土　坑……18

３．火葬墓……19

４．堀立建造物址……19

第３節　遺　物……21
１．縄文時代……21
１）土　器……21
２）土器拓影……22
３）石　器……23
２．奈良・平安時代の出土遺物……34
１）土　器……24
第Ⅳ章　まとめ……27
発掘調査者感想文……29

挿　図　目　次

第１図　位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……2
第３図　調査区全測図……4
第４図　基本層序……13
第５図　第１号住居址実測図……14
第６図　第２、３号住居址実測図……15
第７図　第４号住居址実測図……16
第８図　第５号住居址実測図……17
第９図　土坑実測図……18
第10図　火葬墓実測図……19
第11図　堀立建造物址……20
第12図　縄文土器実測図……21
第13図　土器拓影……22
第14図　石器実測図……23
第15図　土器実測図……25

図 版 目 次

第１図版　遺跡地近影
第２図版　遺跡全影
第３図版　住居址
第４図版　住居址
第５図版　堀立建造物址、土坑
第６図版　土層状況、火葬墓
第７図版　カマド状況１
第８図版　カマド状況２
第９図版　神　　事
第10図版　遺構状況
第11図版　調査状況
第12図版　調査状況
第13図版　遺物出土状況
第14図版　出土土器
第15図版　石器及び土器片
第16図版　調査参加者

第Ⅰ章　遺跡の立地

第1節　位置（第1図）

中山遺跡は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,230番地に所在する。箕輪中学校のグランドが遺跡の中心である。天竜川西岸段丘上突端に列状に並ぶ遺跡の一つであり、箕輪町内における遺跡密集地帯を形成している。周辺には町商工会館、博物館、消防署、町役場庁舎、図書館と続いている。標高はおよそ700mで眼下を流れる天竜川との比高は約30mを計る。

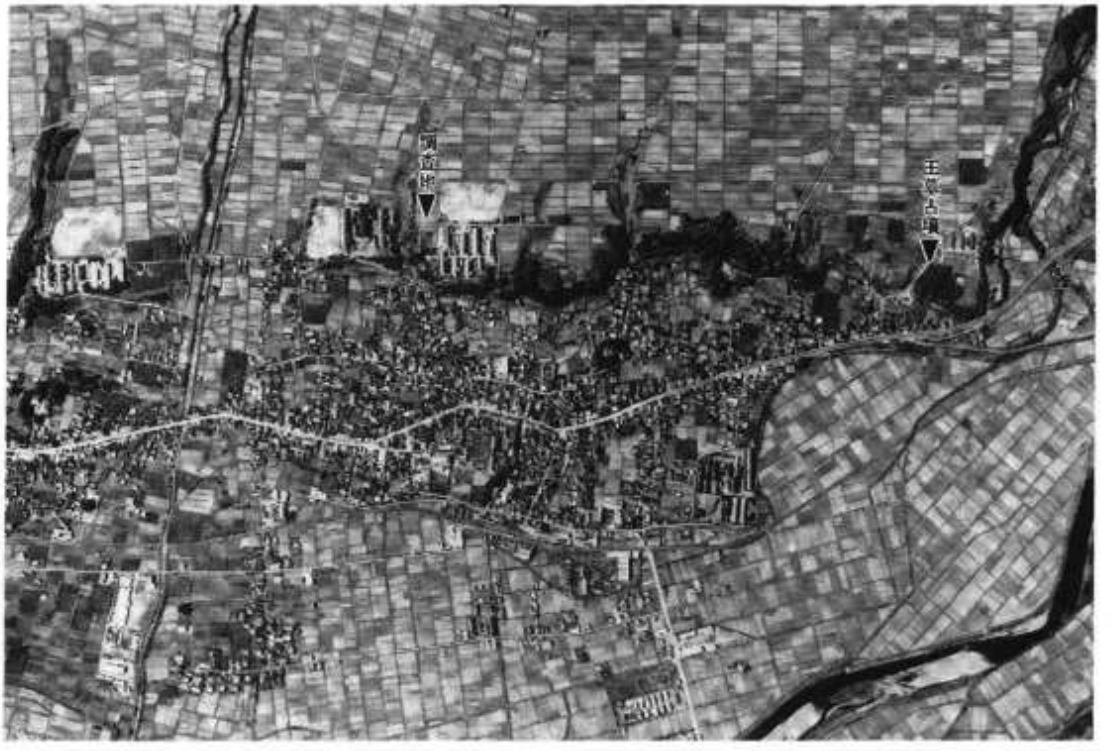
第1図　位　置　図

第2節　自然環境

諏訪湖を源とする天竜川は、伊那の平を形成し、箕輪町を東西に二分するように南流している。遺跡周辺を特色づける地形は、扇状地と河岸段丘である。

天竜川西岸に発達した雄大な扇状地は、天竜川に流れ込む中小河川によって形成されたものであるが、なかでも最も流路の長い大泉川と黒沢山を源として流れる帯無川によって形成された扇状地上の段丘突端に中山遺跡は位置している。この複合扇状地は礫・砂・粘土・ローム（火山灰）等が相重なって堆積したもので、東方に向かって緩やかな傾斜をしている。

遺跡の立地する段丘上より東方に目を転ずれば、眼下には天竜川とその氾濫原が広がり、天竜川左岸（竜東）へと続いている。竜東の扇状地及び段丘等はこの地域においては小規模である。その背後には赤石の山脈を経て、はるかにそびえる雄大な南アルプスの麗峰を見渡すことができる。竜西の複合扇状地の扇頂部・扇央部より地下に浸透した地下水は、伏流水となって洪積台地の下をくぐって段丘崖下に清水となって沸き出している。この段丘下の湧水群は今日でも水道水として重要な水源であり、年間の水温もほぼ一定の15℃前後の測定値が得られている。この豊富でしかも清澄な湧水が段丘上に居住した古代人の飲料水であり、農業用水でもあったのであろう。このように地理的自然条件に恵まれた一帯は古代人にとって絶好の居住地であったにちがいない。



遺跡周辺の地形

第3節　歴史的環境

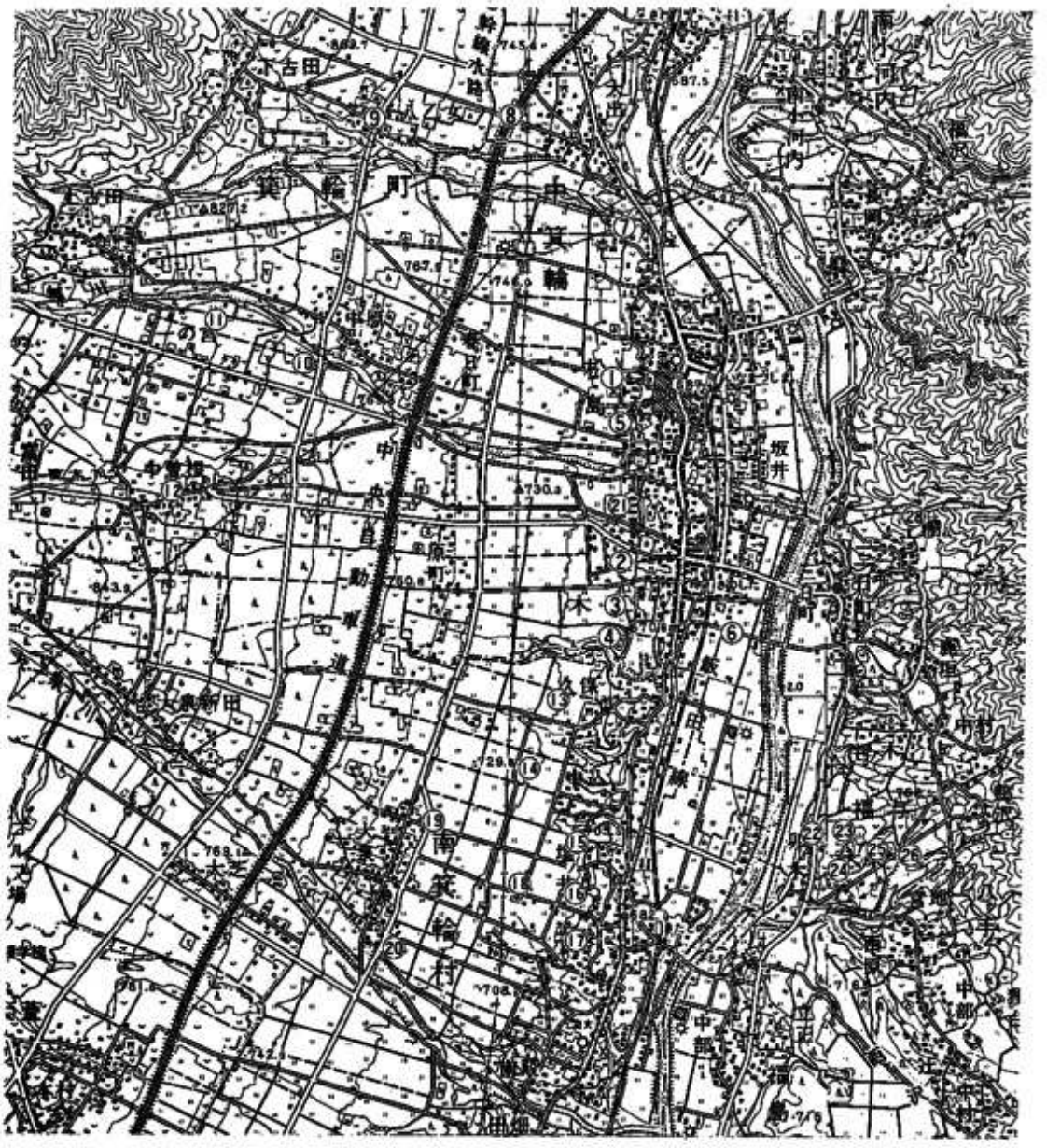
中山遺跡を囲む歴史的環境は実に豊富なものがある。箕輪町は河岸段丘と数多い扇状地によって形成された地形は古代人にとって好的な居住地であったにちがいない。そのため町内には先史より近世に至る歴史上の遺跡に富み、その総数は200ヶ所ほどに及び、上伊那郡内における屈指の遺跡地帯といわれている。

その中においても天竜川西側の段丘突端部に切れ目なく並ぶ遺跡群がある。中山遺跡はこの中の一つである。遺跡の南側には藤山遺跡があり、帯無川を過ぎると県立箕輪工業高等学校のある上の林遺跡に至る。本遺跡は校舎の全面改築に伴い、昭和55年～57年にかけ、３次の発掘調査を実施した。縄文時代早期末から中世に至る多数の遺構・遺物が出土し、その内容がかなり解明されている。続いて南側には北城遺跡が位置している。この遺跡は昭和47年に調査が実施され弥生時代後期から平安時代にかけての大集落が検出されている。段丘上に並ぶ遺跡群の中でも最大級のものと推定される。町境から南箕輪村に入っても同様に遺跡が続いている。北側に目を転ずれば、町役場の位置に松島氏の城跡へと続いている。中世末に武田軍を相手に勇名を鳴り響かせた藤沢氏の支城と伝えられる。現在はこの地内に城主の墓地といわれる場所があり、町指定史跡となっている。

深沢川が天竜川と合流する段丘に、全長60m、前方部の巾45mという壮大な規模を有する松島王墓古墳がある。６世紀後半の築造と推測されるこの大古墳を見る時、これを造ることが可能な絶大な権力と、その経済力は何であったのであろうかと考えさせられる。周辺の地形を見てまず目に入るのが段丘下の氾濫原である。ここは箕輪遺跡と呼ばれる遺跡地帯であり、その規模は100ヘクタール余といわれている。古代水田址を含む遺跡であり、当時から米生産の一大中心地であったと考える。これは古墳出現の大きな要因であり、以後においても、ここ一帯から生産される米は、時代の権力者の目をつける所となっている。その一つとして、藤沢頼親が建武年間に箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、その天険もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源とするという目算理由があったと思われる。田中城を水田地帯の真中に築いたのも同様な考えがそこにあったものと推測される。

一帯の歴史的環境はどの時代を見ても、段丘上と天竜川面とが、必ず何らかの関係を有して来ている。これは竜東においてもほぼ同様なことがいえる。

中山地籍は現在箕輪中学校の敷地が大部分を占めている。遺跡の中心はグランドの下になっているが、大切な遺跡の一つである。



①中山　②北城　③南城　④猿楽　⑤藤山　⑥箕輪　⑦王墓古墳
⑧中道　⑨五輪　⑩並木下　⑪一の宮　⑫中曽根北　⑬向垣外　⑭山の神
⑮天伯　⑯上人塚　⑰垣外　⑱内城　⑲大泉　⑳宮の上　㉑上ノ林
㉒北垣外　㉓黒津原　㉔矢田　㉕上金　㉖大原　㉗澄心寺　㉘御射山

第２図　周辺遺跡分布図

第Ⅱ章　調査の経過

第１節　発掘調査に至るまで

中山遺跡は昭和30年の統合中学校建築時において遺跡の範囲などが一部確認されていた。昭和57年より開始された校舎全面改築により、旧校舎跡地の一部を発掘調査し、遺跡の保存状況を主目的とした緊急調査を実施した。これが第一次調査である。

次に、中学校プール建設に伴い昭和61年度に第２次調査を実施した。今回は社会体育館建設に伴う緊急発掘調査であり、中山遺跡の南側の一部に当たる部分である。

イ）　調査の概要

・遺跡名　中山遺跡

・所在地　長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,230番地

・発掘期間　昭和62年４月５日～４月30日

・調査委託者　箕輪町教育委員会

調査団の構成は下記の通りである。

ロ）　調査団

団　　長　樋口彦雄　箕輪町教育委員会教育長

担 当 者　柴登巳夫　箕輪町郷土博物館主任学芸員

調 査 員　石川　寛　箕輪町郷土博物館学芸員

調 査 員　竹入洋子

ハ）　発掘調査団員

堀内昭三	荒川織光	井上武雄	唐沢清人	藤森秀男	小松敬一郎	小林信義
山岸　工	小林光治	岡　　正	唐沢光国	松田幸雄	小池久人	藤森由幸
夏目元江	浦野　弘	後藤又市	小松かほる	根橋とし子	今井孝子	野沢徳章
山内志賀子	唐沢正十	小平和子	野村金吉			

ニ)　調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口　彦雄	箕輪町教育委員会教育長
上島冨作夫	箕輪町教育委員会社会教育課長
太田　文陳	箕輪町教育委員会社会教育係長
柴登　巳夫	箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川　　寛	箕輪町郷土博物館学芸員
赤沼　悦子	箕輪町郷土博物館臨時職員

第2節　調査の概要

1．調査日誌

4月5日

調査準備、テント設営、調査地が、箕輪中学校の南側であり、近いため、搬入等はスムースであり、午前中でほぼ終了する。午後より地層状況を把握するため、調査地の中約10ヶ所にテストピットを入れる。調査区南側約半分は自然堆積と考えられる地層であるが、校舎に近い北側は、深い砂利層で発掘調査の対象にはならないと考えた。そのため調査面積はやや少な目になると思われる。

4月8日（晴）

表土を機械により排土し、その後から、グリッドの設定と作業を進める。排土場所は東側、西側それに、砂利層の堆積で、調査対象にはならない北側の部分とする。

グリッドは東南の角を基準点とし、南北にアルファベットを、東西に数字を配し、グリッド番号を記す。本日は約15グリッドに手をつけたが、そのうちB－9グリッドより、集石、炭、骨片の発見があり、出土の状況から、火葬墓的な遺構であろうと推定した。

またF－7グリッドには落ち込みが見られる。遺物としては、縄文土器片少量、須恵器がわずかに見られる。

4月9日（くもり）

午前10時より神事を行う。町長、教育長、箕輪中学校長、関係課長、調査団参加の下に実施、調査団の結団式においては、教育長より、調査団員の方々に委嘱状が手渡された。

作業の安全と、調査の成功を願った。作業はグリッド調査に始まり、南側土手寄りの自

然地形の残っている部分を中心に東西の地層状況を調査、F－7グリッドに土拡、E－8グリッドに土拡確認。B－11、E－8、C－8、D－11等のグリッドを堀り進める。

4月11日（くもり）

南壁の地層断面図作成、自然地形（水田面のため、盛土あり）が残っている部分であり、水田の造成工事の状況がよく観察できた。D、E、F－11グリッドを中心に大きな落ち込みが検出される。大きな方形の落ち込みであり、住居址となる。第1号住居址とする。

F－7グリッドの落ち込みを土拡1、E－8グリッドの落ち込みを土拡2とする。住居址の中にはベルトを残し、プランの確認を進める。須恵器、土師器片出土。

4月14日（晴）

第1号住居址内の土を出す作業から始める。ベルトを十文字に残し、住居址内を4ヶ所に分けて床面までの排土である。

H－8グリッドを中心に方形の落ち込みが見られ、周囲調査の結果第2号住居址となる。土師器出土。その他にJ－11、H－11、L－11、H－9、I－9等のグリッド掘りの作業を進める。

4月15日（晴）

第2号住居址内にベルトを設置し、排土を始める。火葬墓と推定される遺構の精査、第1号住居址ベルトの清掃、土拡1、2を半カットし内部の土層調査、火葬墓写真撮影、調査面を広く拡大する。

4月16日（晴）

土拡1、2を完掘し精査する。精査後平板、断面等の測量を実施、写真撮影を行う。調査

区の中央寄りに柱穴列が発見される。穴の径は40cm前後と大きく、今日のところでは1列4ヶ所の発見であるが、この列に対応する状況が検出されるものと推測する。

調査範囲内の西側をブルトーザーによって排土、グリッド調査も北側、西側へ進める。

4月17日（晴）

昨日発見された大型柱穴列に対応する4ヶ所の柱穴が発見され、2列8ヶ所よりなる大型建造物址のプランが明確になる。

以前において、上の林遺跡からこの遺構に類似するものの発見があったが、大きな規模である。

4月18日（晴）

J－26、27グリッドを中心に方形の大きな落ち込みが有り、これを第3号住居址とする。東壁にカマドを有するものと思われる。

住居址覆土中から縄文土器片の出土も見られる。

大型建造物址の規模であるが南北約6m、東西4mほどを示している。この建造物址の範囲中から縄文土器片が見られる。

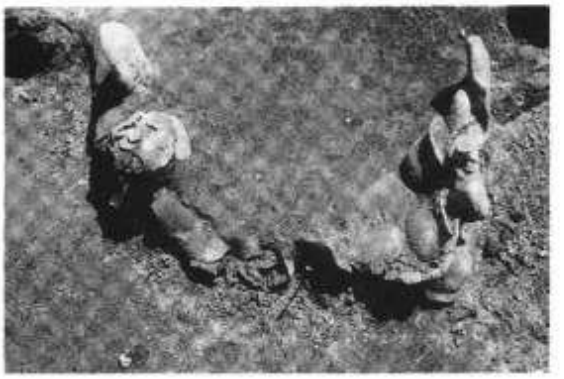
4月20日（晴）

大型建造物址精査、清掃、写真撮影、平板測量、断面測量実施。J－11、G－10、I－26、K－26等のグリッドを掘り進める。

南側寄りの部分においても砂利の集中する場所が見られ、いつの時期か、河川の動きがあったことを物語っている。これ等砂利の範囲においては、遺物遺構見られず。

4月21日（晴・くもり）

各住居址内の精査に入る。第1班第1号住居址担当、第2班第2号住居址担当、第3班



は土器集中区を担当、この集中区からは3個体の縄文土器が検出された。最も大型のものは逆位であった。住居址の中に位置する埋甕が普通であるが、この三点は、そのような状況になく、単独的な出土である。

4月22日（晴）

住居址内の床面の精査が進むにつれ、内部施設の調査に移る。主柱穴を掘る。1、2号住居址内においては主柱穴の位置がはっきりせず、また、浅いものが多い。土師器の坏など出土する。

住居址の断面実測。

4月23日（晴）

第1、2号住居址ベルト清掃、写真撮影、土器集中区における埋甕掘り。第2号住居址のベルトをはずし完掘する。カマドは東壁に位置し、カマド右側にピットがあり、中から土器が検出される。

平面測量、写真撮影の用意。

4月24日（晴）

第1、2、3号住居址の主柱穴をさがし、完全な状況にしてから測量の順序にと考えたが、どの住居址も、主柱穴の位置がはっきりしない。第1号住居址平面測量、第4号住居址内の排土作業。

グリッドの掘りはほぼ終了する。予定面積内の状況はおよそ把握することができる。

4月27日（晴）

第4号住居址ベルト断面測量、後にベルトを取りはずす。1、2号住居址カマド測量、住居址断面測量、第4号住居址カマド測量。第4号住居址のほぼ中央部に焼土がある。第1号住居址の北側に落ち込みあり、第5号住

居址とする。この住居址はプランと主柱穴は確認されたが、床面はきわめて軟弱であり、また住居址内の施設や出土遺物等全く無く、住居址として使用したとは考えられない状況であった。1、2号住居址清掃、写真撮影、土器集中区においては土器の掘り下げを実施する。

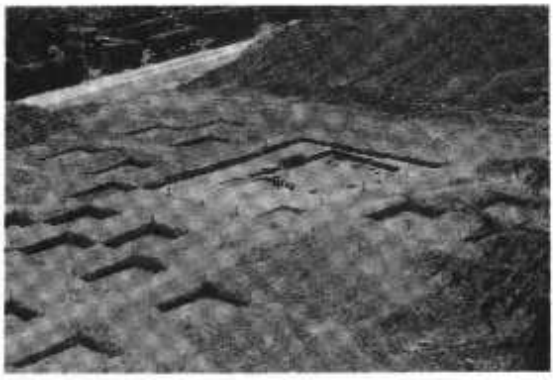
4月28日（晴）

第5号住居址精査、平面測量、第4号住居址カマド調査、第1、2号住居址カマド調査、午後から全体測量に入る。調査区全体の清掃、写真撮影。

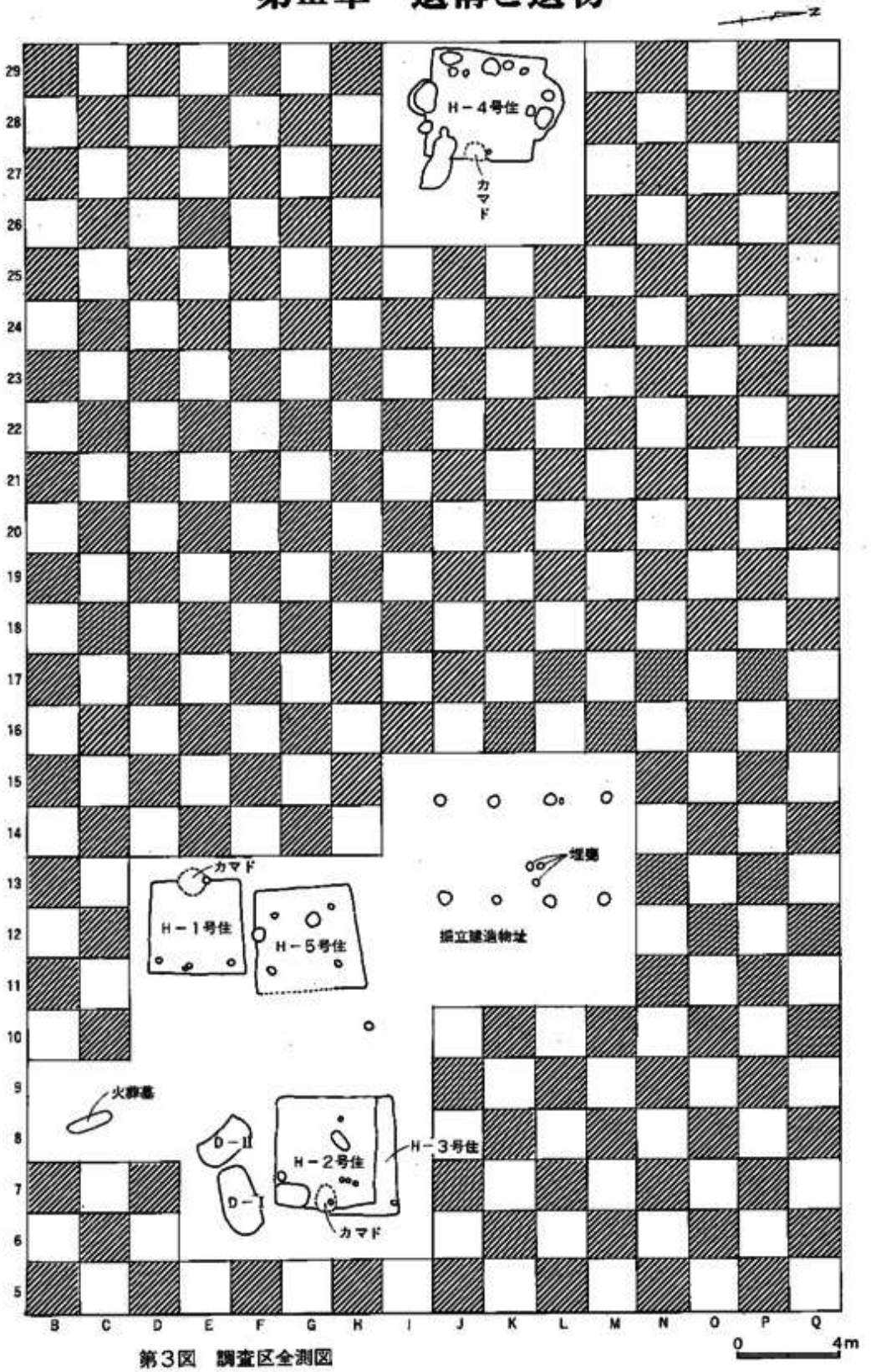
4月30日（晴）

第4号住居址精査、測量、全体測量、片付作業。

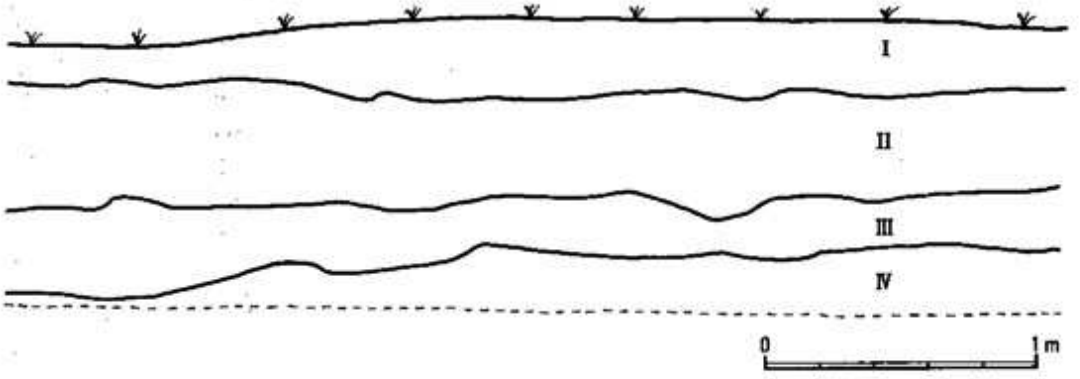
本日をもって中山遺跡の調査を終了する。



第Ⅲ章　遺構と遺物



第3図　調査区全測図



第4図　基　本　層　序

第1節　基本層序

発掘調査区東南の角の位置に基本層序を調査するためのベルトを設定した。東西に4mの長さを対象とし、表土からローム面までの状況を観察できるようにしている。

この場所は西天竜の開田工事において、水田化された場所であり、以前は畑地帯であったものを、昭和の初期に水田にしたものである。そのため土の移動の状況を調査し、現地形をきちんと把握することが、発掘調査に入る前の段階としての大切な仕事である。

図に示すように第Ⅰ層は水田の耕作土である。第Ⅱ層は水田を造成した時の移動した層である。小石やロームその他いろいろな土が混入している。約40cmの堆積が見られる。

第Ⅲ層は黒色土で、以前の畑層である。この畑の耕作土上にⅡ層をのせて、平面な水田にしたのである。Ⅳ層は黒褐色土層で、遺物包含層である。

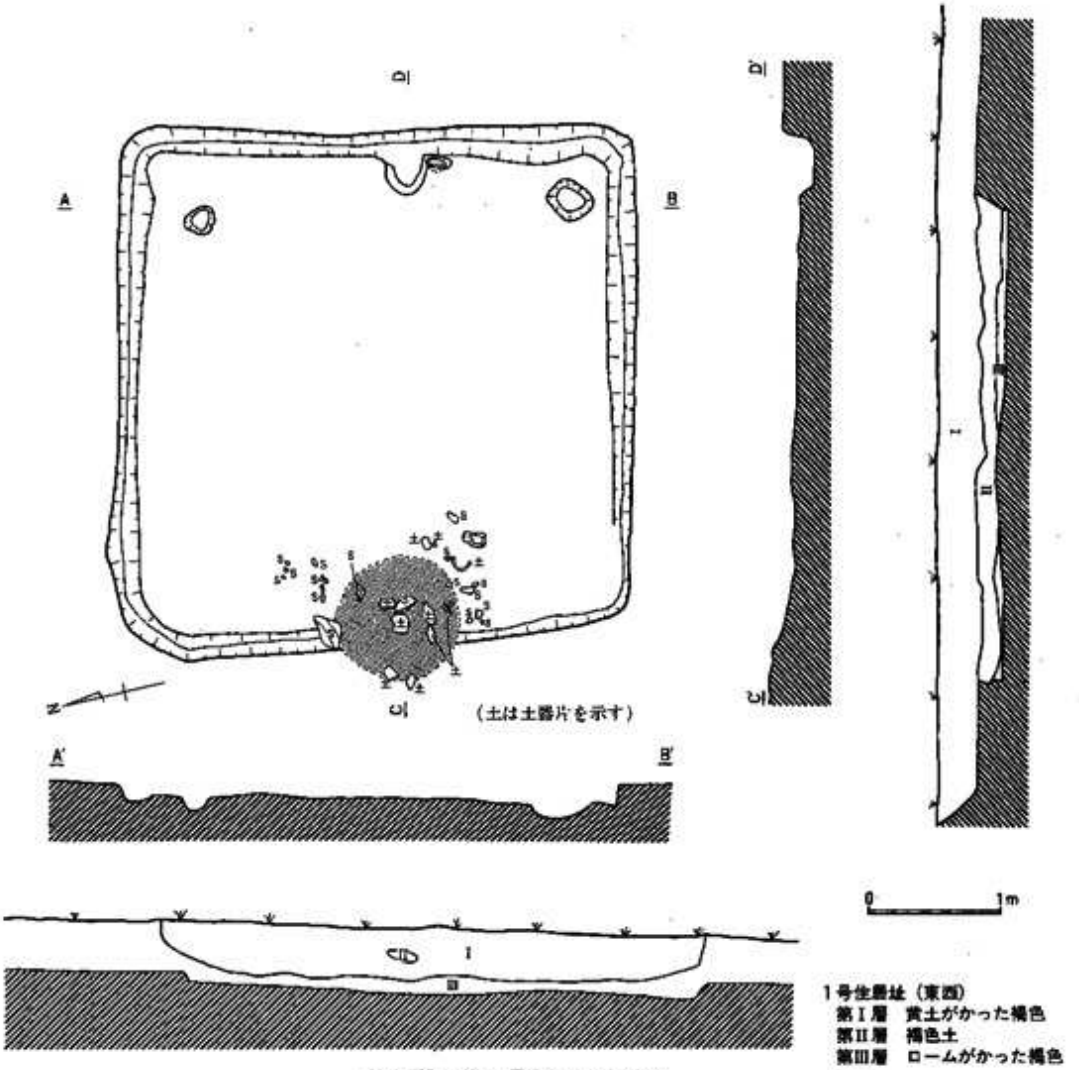
基本層序

第Ⅰ層　黒色土　耕作土（水田）

第Ⅱ層　茶褐色土　埋積土

第Ⅲ層　黒色土　畑の耕作土

第Ⅳ層　黒褐色土　遺物包含層



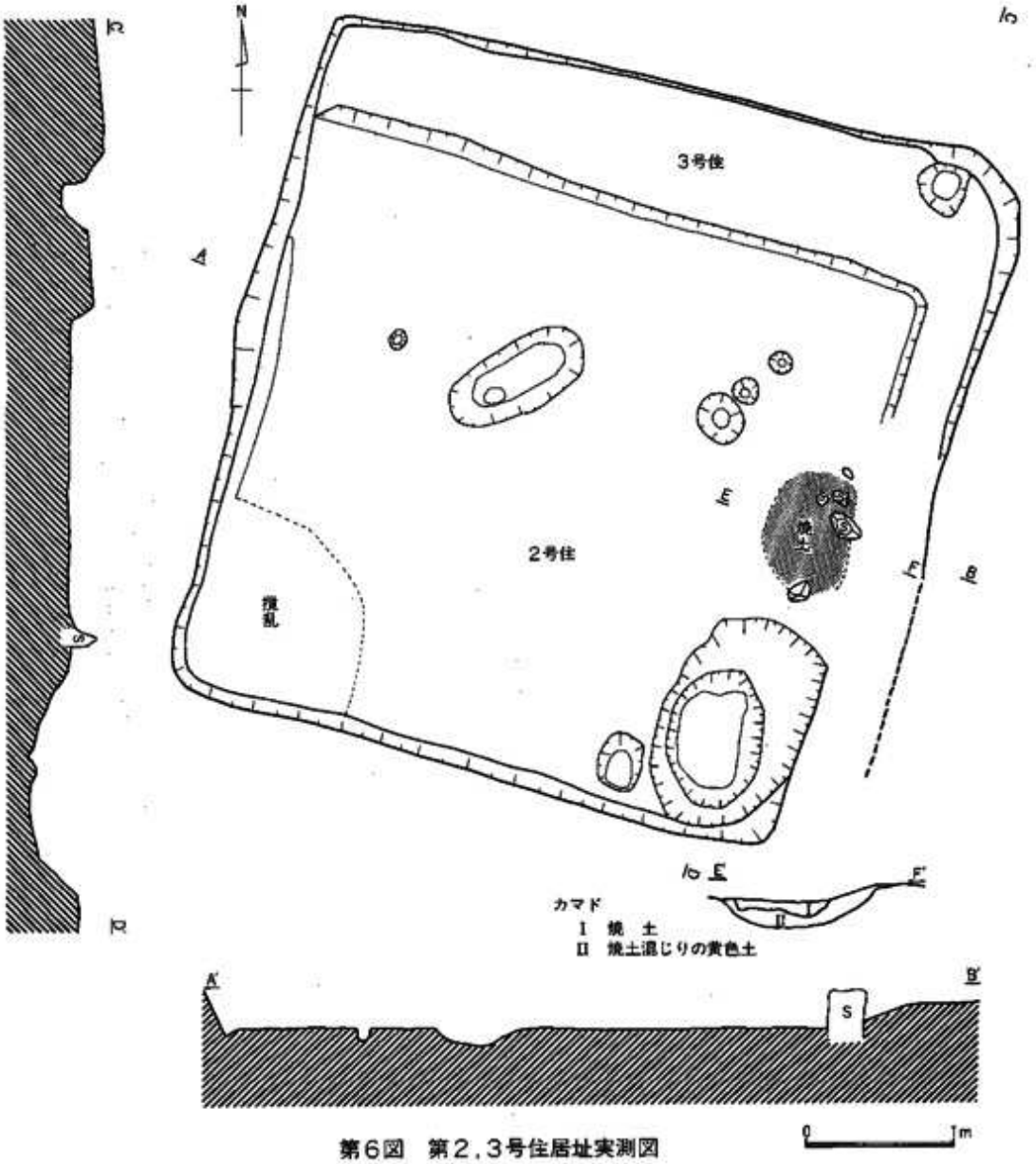
第5図　第1号住居址実測図

第2節　遺　構

1．住居址

1）　第1号住居址（第5図）

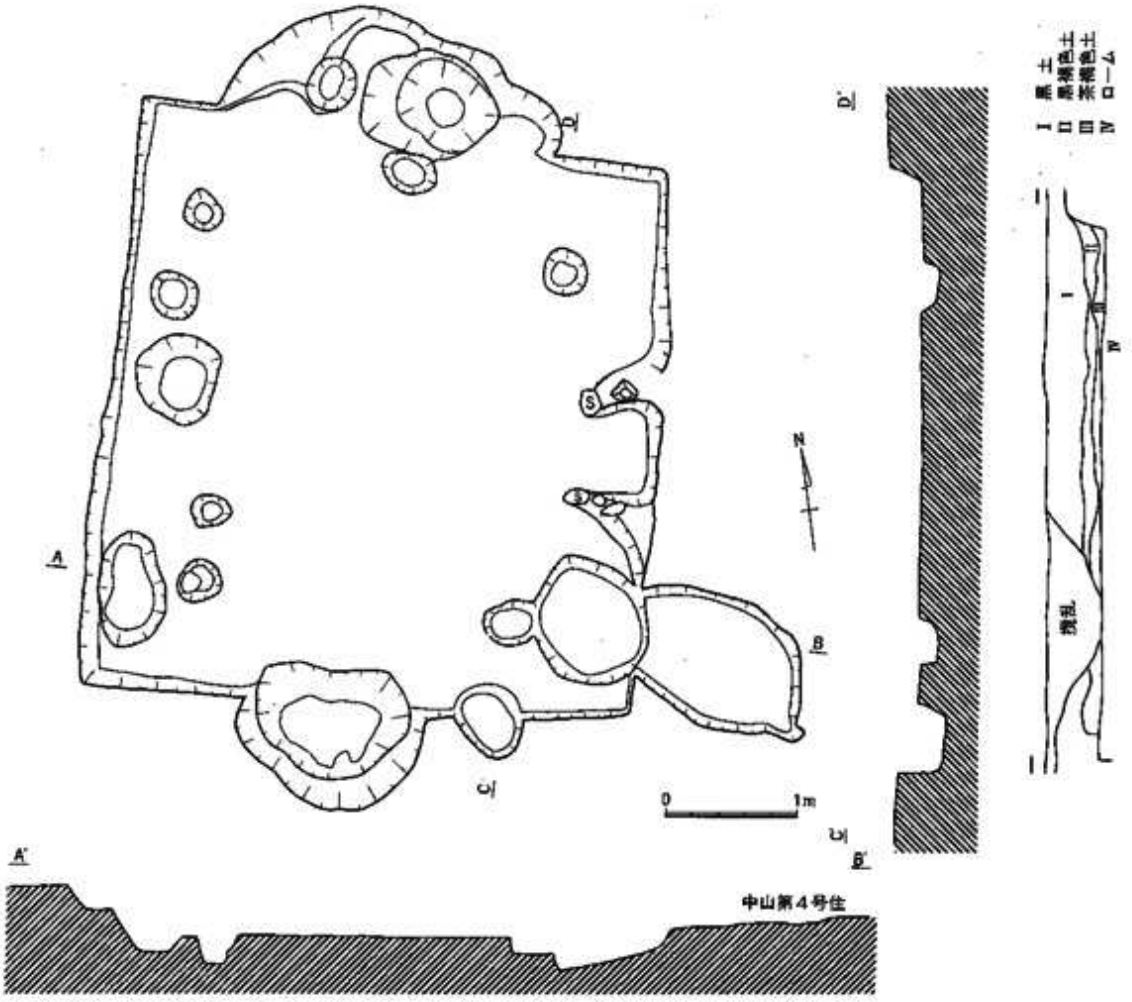
調査区東南の道路寄りに位置している。西壁はほぼ中央にカマドが位置しているが、カマドを構成する石は小さなものばかりであり、袖の芯石は見られない。火床部は一面に焼けているがあまり長期間使用したカマドには見えない。住居址は直径ほぼ4mの正方形に近い形を呈し、一部に周溝が見られる。床面はあまりはっきりせず、主柱穴の発見はできなかった。出土遺物はカマド周辺を中心に土師器坏が発見された。これ等の遺物から見て8世紀後半の住居址である。



第6図　第2，3号住居址実測図

2）　第2、3号住居址（第6図）

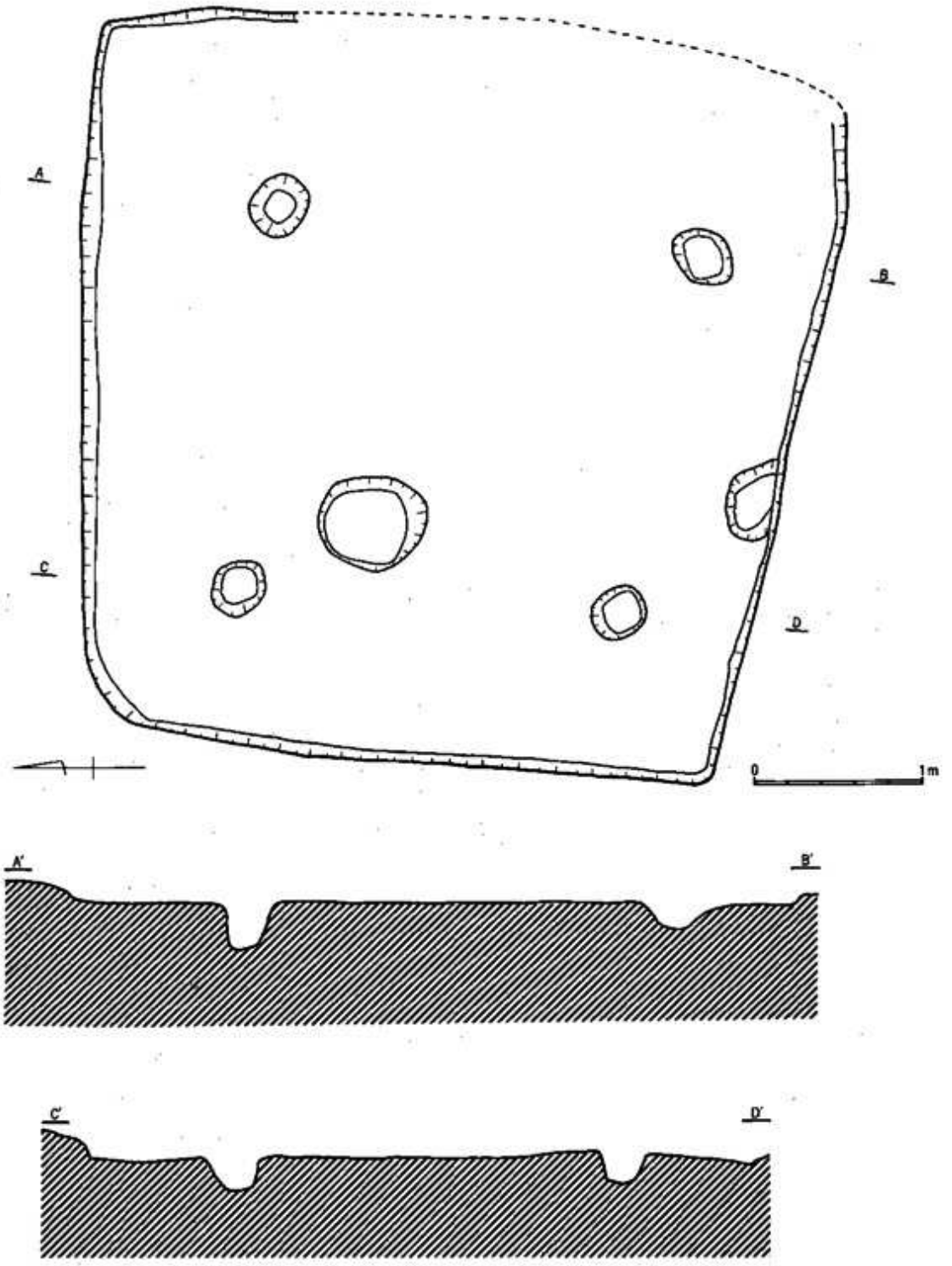
調査区東寄りのG・H－7・8グリッドを中心に発見された住居址である。まず第2号住居址の南壁が確認され、それに続いてほぼ全体のプランが検出されたが、北壁と東壁がどうもはっきりせず、不安定であった。東壁ほぼ中央に石組カマドが発見された。結果的には第2号住居址は第3号住居址の中にほぼすっぽりと入り込んで構築した形である。そのため、第3号住居址は北壁と、東壁の一部が確認されたのみで、遺物等は見られなかった。第2号住居址のカマドは芯石を立てて構築している。出土している土師器や須恵器から見て第2号住居址は9世紀中ごろから後半の時代である。



第７図　第４号住居址実測図

３）　第４号住居址（第７図）

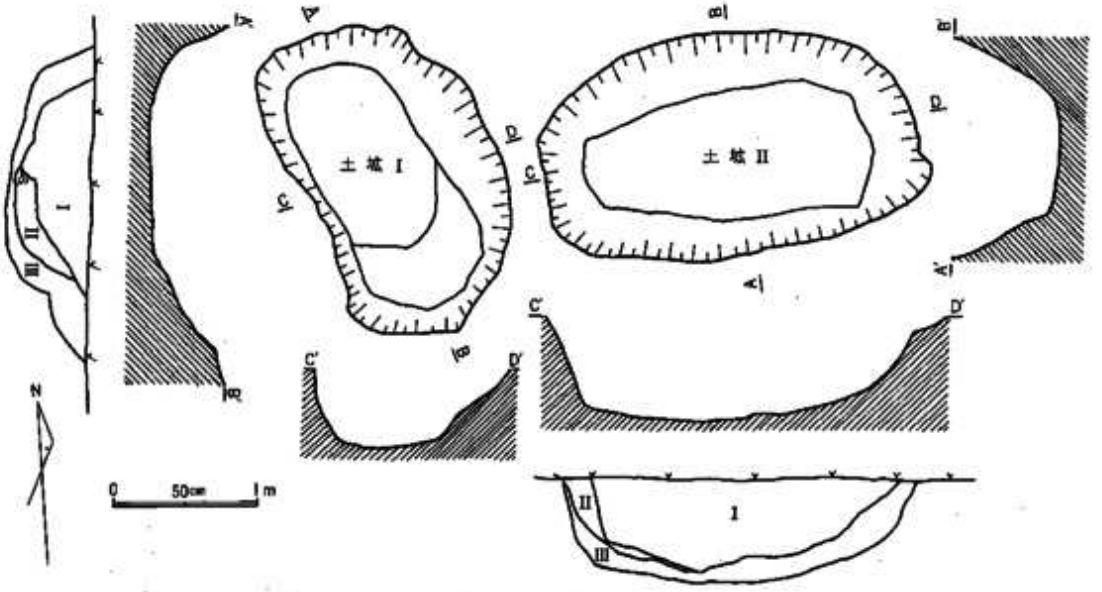
表土を機械排土している段階に確認された住居址である。調査区最も西寄りに位置している。住居址のプランは東西４ｍ20cm、南北４ｍ40cmのほぼ正方形を呈し、カマドは東壁の中央に構築している。カマドは頭大の平石を立てて芯石としており、袖をしっかりと形成している。袖の中には、土師器片も入れ補強している。住居址の床面は非常にしっかりしており、平らに仕上げている。主柱穴はあまり深くないが、位置はきちんとしている。壁はかなり急な斜壁になり、南北の壁は土坑によって荒れている。出土遺物はカマドの中及び周辺に集中している。第４号住居址は８世紀初頭の時期と考える。



第8図　第5号住居址実測図

4） 第５号住居址（第８図）

第１号住居址の北側に並ぶように検出された住居址である。本住居址はグリッド調査の段階では確認されず、第１号住居址の周囲を清掃している時に落ち込みの一部として目に止まったのである。本住居址は１辺４ｍ余の方形プランと、４ヶ所の主柱穴が確認されたのみで、他には遺物も内部施設も全く見られない住居址なのである。床面はきわめて軟弱でプランもはっきりしない。壁高はわずかであり、東壁は推定プランである。このような住居址なので時期も不明であり、また住居として使用したとは考えられない。このような住居址をたまには見ることもあるが、何らかの都合によって住居の構築を中止したものであろう。



第９図　土坑実測図

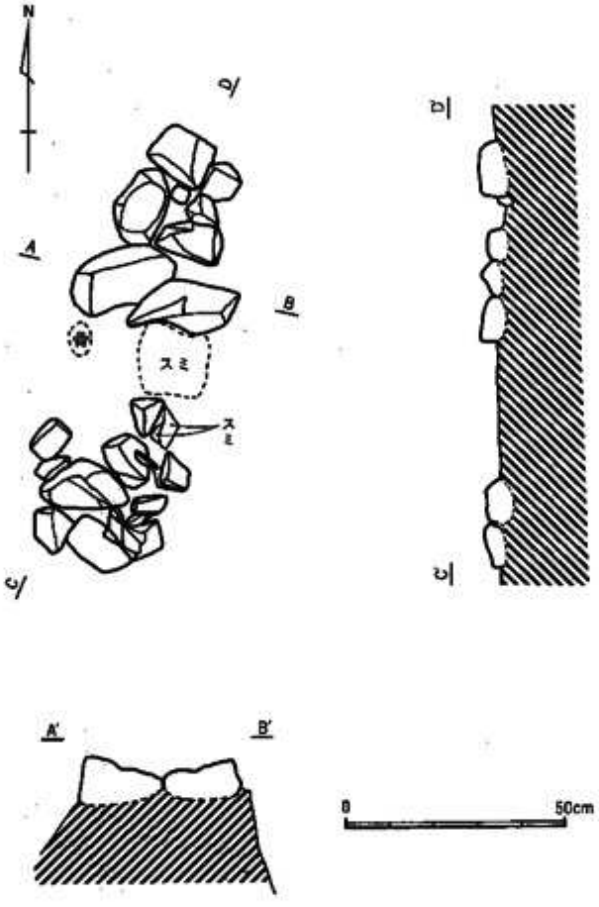
土　坑　Ⅰ
　Ⅰ層　黒色土
　Ⅱ層　黄土まじり黒色土
　Ⅲ層　黄色土

土　坑　Ⅱ
　Ⅰ層　黒色土
　Ⅱ層　黄土まじりの黒色土
　Ⅲ層　黄土色

2．土坑

第２号住居址の南側、Ｅ・Ｆ－７・８グリッドを中心に２ヶ所の土坑が確認された。土坑Ⅰは長径2.7m、短径1.6mを計る小判型を呈しており、深さは1.15mである。遺物は全く見られない。土坑Ⅱは土坑Ⅰの西側に並んでいる。大きさはⅠよりやや小さい。遺物は全

く見られない。このような土坑は縄文中期によく見られるが、周囲から中期の土器片が散見されるだけで、この土坑と時期的に一致するものは見られない。埋葬的な施設と見るのが良いのであろうか。



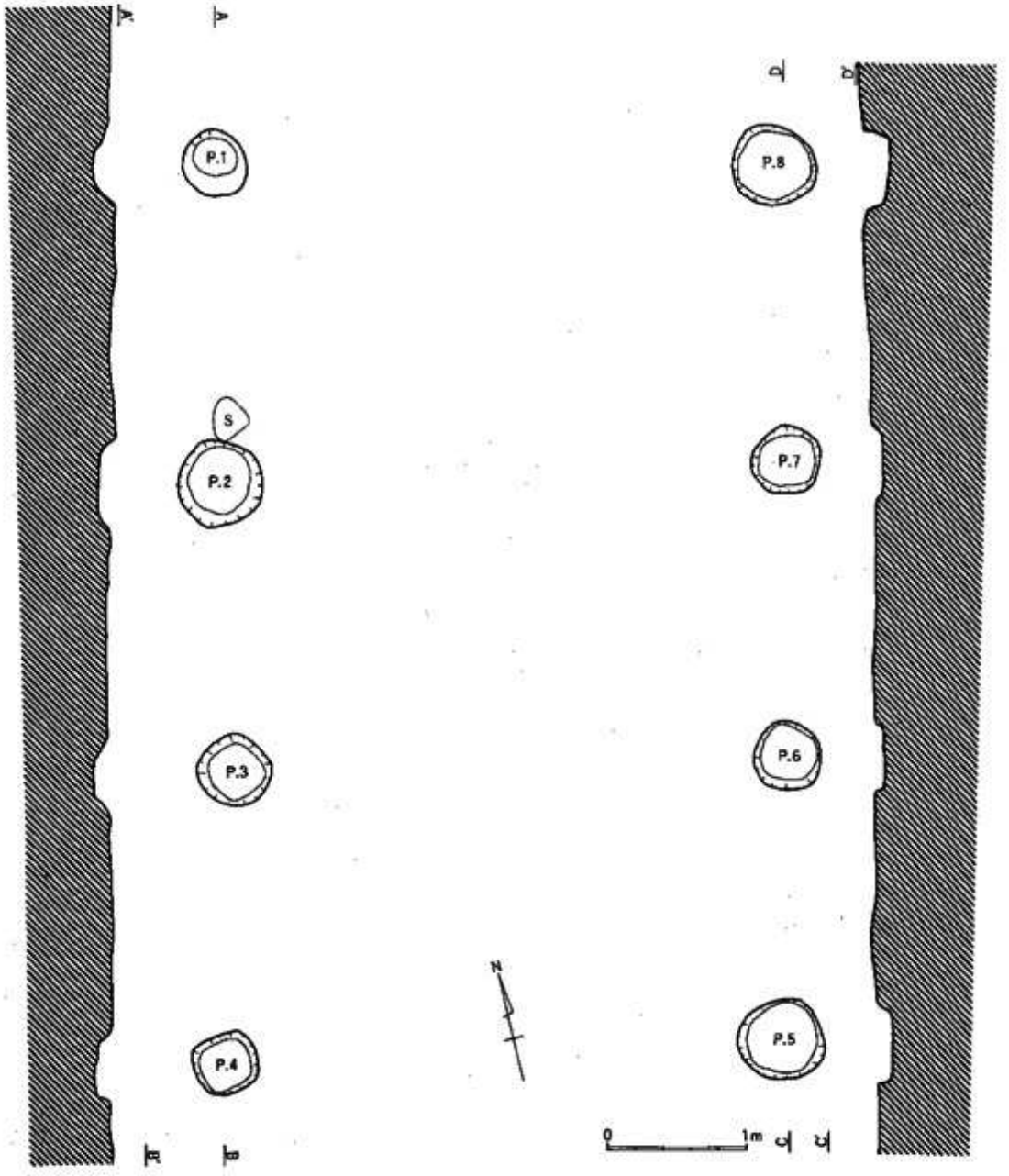
第10図　火葬墓実測図

3．火葬墓（第10図）

基本層序で確認するためにベルトを設定したが、そのすぐ前に火葬墓が一基検出された。長径約１ｍ、短径40cmの長方形の範囲内に拳大から頭大までの石約30個を平面的に並べて形成している。その中には炭と骨片が残り、状況から推定して火葬墓と考えられる。これとよく似たものが北城と南城遺跡から確認されている。層位的には基本層序Ⅲ層下部からⅣ層にかけての深さであるため、中世ころのものと考えられる。

4．堀立建造物址（第11図）

発掘調査区のほぼ中央に発見された遺構である。13、14－K．L．Mグリッドを中心としている。柱穴列はほぼ南北に並び、４ヶ所づつ２列が確認された。柱穴は径25～30cmときわめて大きく柱穴の芯から芯までの長さは２ｍ５cmとなっている。またP_4～P_8の長さは４ｍである。建物の大きさは約６ｍ×４ｍであり、このような遺構は上の林遺跡第３次調査時において検出されている。第１～４号住居址のいずれかの時期に伴うものと考えるが、本遺構の時期を決める遺物は見られなかった。堀立建造物としては大型の建物である。



第11図　堀立建造物址実測図

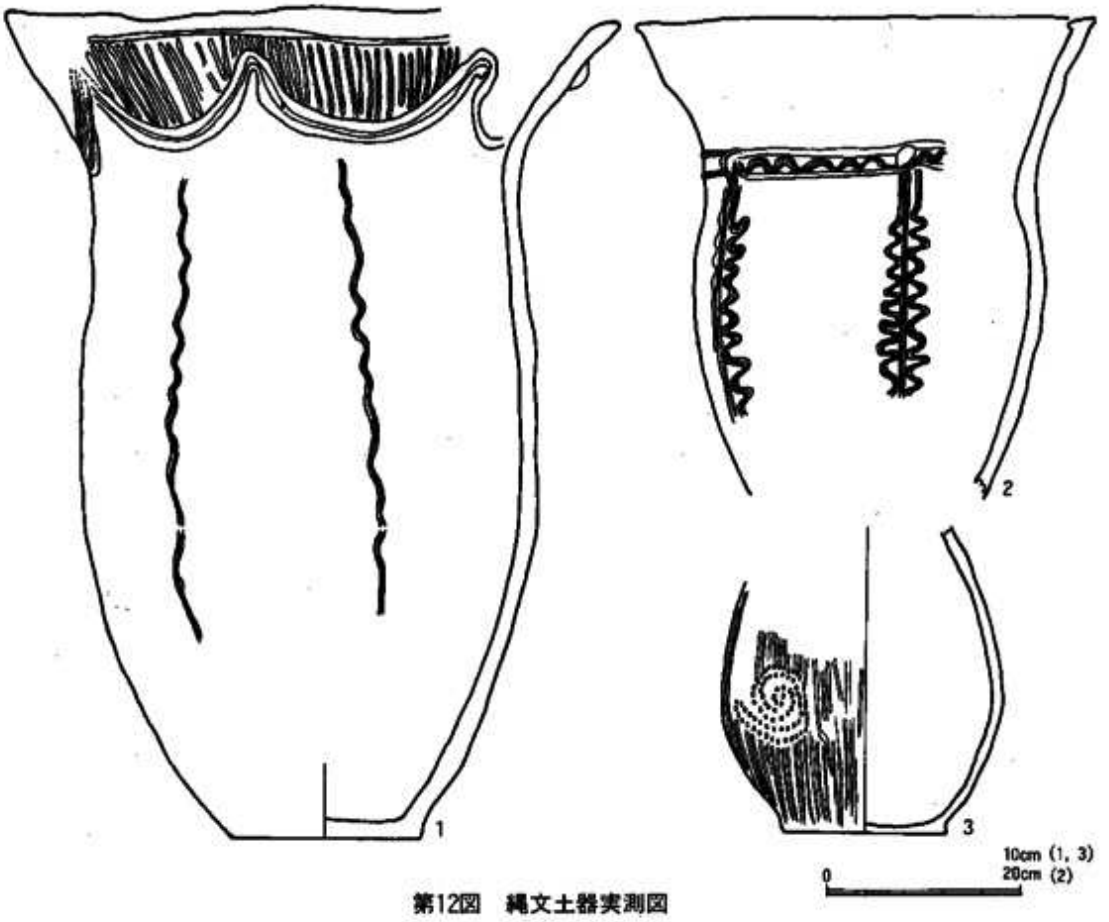
第3節　遺　物

1．縄文時代

1）　土器（第12図）

第12図に示す縄文土器は、遺跡地ほぼ中央の、堀立建造物址の遺構の中に位置していたものである。三点共に埋甕状に掘り込まれて位置していた。特に２は口縁部を下にして、逆位の状態であった。１は器高42cm、口縁の径31.5cmを計る。器面全体に縄文を施し、文様は口縁部に集中している。器形は胴部がやや張り、頸部が細くなり、そこから口縁部にかけ外反しながら開いている。口縁部の文様は隆帯と沈線が主体で、隆帯で外形を形成し、内側は沈線で文様を付けている。櫛形文の残りが見られるが、わずかである。頸部から胴部にかけ、沈線による懸垂文が付けられている。胎土中には少量雲母を含み、焼成は中位である。

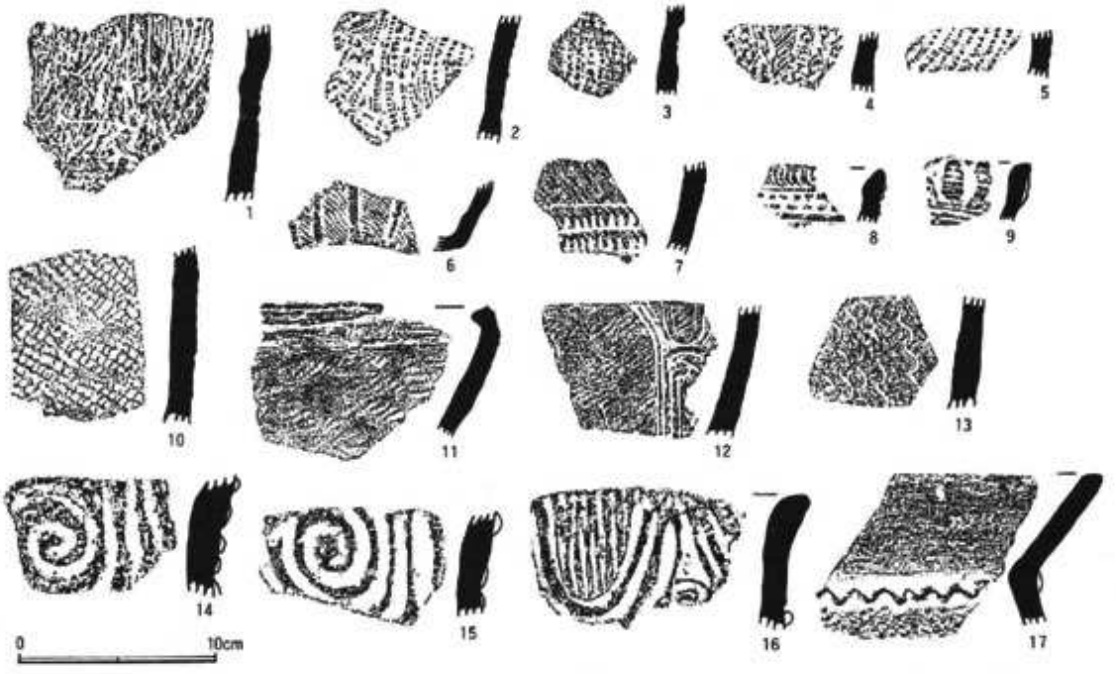
２は逆位の伏甕である。器形は胴部がやや張り、頸部から口縁にかけて大きく外反し、開いている。文様は頸部から胴部にかけて隆帯の貼付文が主である。器面全体には縄文を施してい



第12図　縄文土器実測図

る。底部を欠損しているが、器高は60cmほどはあると推定でき、口縁の径は47cmである。

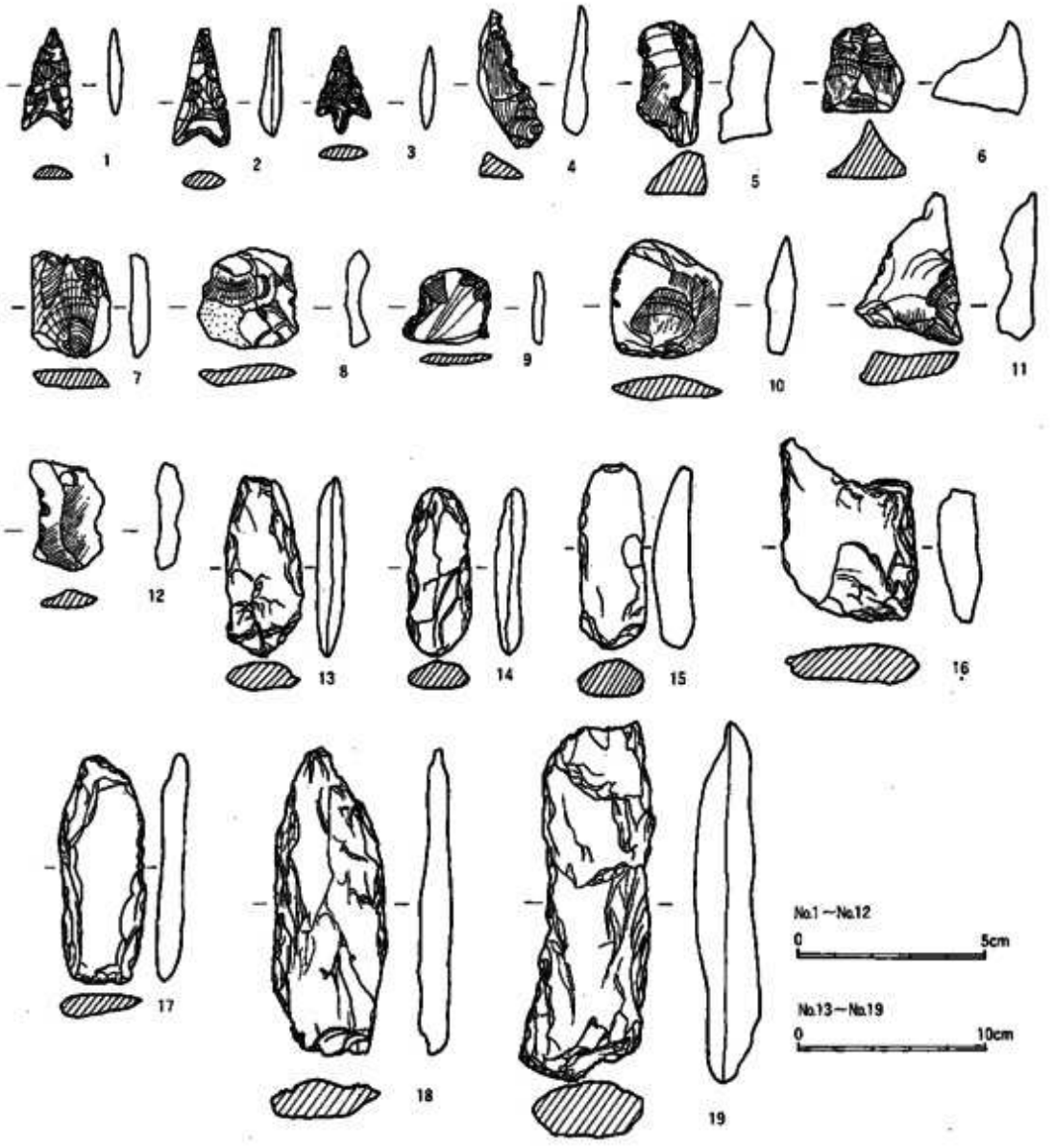
3は小型甕である。頸部から口縁にかけては欠損している。文様は器面全体に及び、連続刺突文と沈線文によって構成されている。いずれも曽利Ⅱ式期の特徴を示すものである。



第13図　土　器　拓　影

2）　土器拓影

1はグリッドの調査中に、ただ1片だけ出土した土器片である。以前においてはこの段丘上では見かけない土器である。赤褐色の胎土にセンイが混入しており、焼成はあまり良好でない。内外面共に条痕文が施され、器面の調整はよくない。縄文早期末葉の段階に位置づけられる土器であろう。2～6は半割竹管工具を多様して文様を付けているもので、前期後半の土器である。いずれも焼成の良好な土器である。7～9も半割竹管工具による施文が主で、文様は口縁部に集中している。縄文時代中期初頭の梨久保式の特徴を示している。10～11は大き目の縄文を字文としており、中期の勝坂式土器の特徴が見られる。14～17は厚手大型土器の一部で曽利式土器の特徴が見られる。胎土中には多量の雲母を含み、黄褐色を呈し、焼成は中位である。



第14図　出土石器実測図

3）　石　器（第13図）

本調査における石器の検出は19点を数えた。うち黒曜石を材としているものが11点である。1～3は石鏃で、1は無柄鏃で、両脚間の抉りがやや深く、全体に薄手に仕上がっている。両縁辺は非常に鋭く、先端もきわめて尖り、鋭い石鏃である。2は砂岩製の石鏃である。両縁辺をほぼ直線的に造り出し、両脚も形よく形成されている。先端を一部欠損しているだけで、完形品である。3は有柄鏃で、非常に形の整った完形品である。脚部は6㎜を計り、ほぼ直線的に造り出されている。4～12はいづれも黒曜石製のスクレイパーである。片側縁及び、両縁辺

に刃部を設けている。10は刃部を全縁に設けており、ラウンドスクレイパーに近いものである。また部分的にはノッチを付けているものも見られる。

次に13～19は打製石斧である。いずれも短冊型の石斧で、15、17は母石の側縁を利用しており他は石の芯を用いている。15は使用を繰り返したことを物語るように刃部が磨耗している。石斧の材質は、緑泥岩、粘板岩、砂岩等である。

2．奈良・平安時代の出土遺物（第15図）

1号住居址出土遺物（No.1～5）

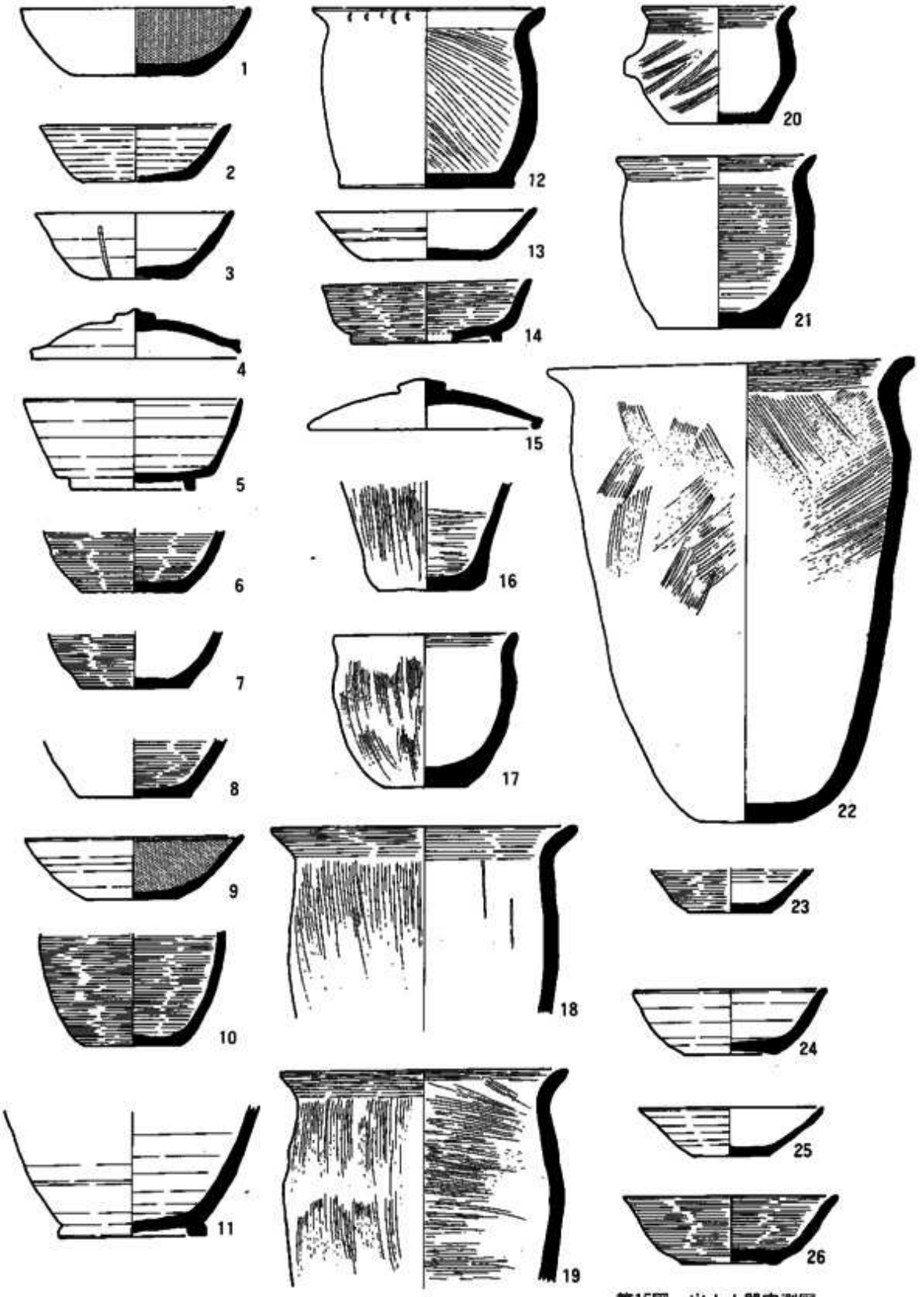
1号住居址からの出土遺物は、土師器の坏（No.1）、須恵器の坏（No.2、3）と蓋（No.4）と高台付の坏（No.5）である。No.1は、ロクロ成形後、外面は丁寧なヘラケズリによる調整が底部にまで顕著に施される。内面は黒色処理とヘラミガキが施される。No.2は、器厚が薄く焼成もあまり良好でない。また胎土中に、石英等の小礫を多量に含んでいる。それに対しNo.3は器厚もNo.3よりも厚く、小礫の混入も少なく、木目の細かな胎土で焼成よくしっかりと焼しめられて硬質である。更にNo.3の大きな特徴は、口径に対する器高の割合がNo.2より高いという点である。No.4の蓋は、焼成・胎土等の特徴で、No.2に類似性が認められる。No.5は、ロクロ成形後、底部ヘラケズリ後に高台部の取り付けが行われている。焼成・胎土等の特徴は、No.2・4に類似性がある。

本住居址より出土した5点の遺物は、およそ8世紀後半の時期に位置付けられると思われる。しかし、No.1の土師器の坏は、この中でも若干時間的に先行するのではないかと推測される。また、No.3の坏もNo.2と比較して、時間的差異が感じられる。

2号住居址出土遺物（No.6～12）

土師器の小型甕（No.6～8・10・12）、坏（No.9）と、灰釉陶器の高台付小型甕（No.11）の出土がみられる。No.6～8・10の小型甕はロクロ成形で、特にNo.10は器厚が薄手である。赤褐色で一部橙色を帯び、No.6・10は内面に炭化物の付着が認められる。No.12は輪積み成形で、口縁部は短く外反し頸部からあまり大きなふくらみをみせず、ほぼ直に底部へ移行する。底部が大きく、底径と口径と胴部最大径、また器高もほぼ同じ法量であり、安定性の良い形態である。内外面共に、ヘラケズリ及びナデによる器面調整が施される。No.9の坏はロクロ成形で、内面が黒色処理及び丁寧なヘラミガキが施されるものである。No.11の灰釉陶器の高台付小型甕は焼きしめが硬く、灰白色で釉の付着はほとんどみられない。ロクロ成形の後、底部をヘラケズリし高台部の取り付けを行っている。

これらの13点の出土遺物のうち、No.7・9・12はカマド内より出土したものである。出土遺物は、およそ9世紀中頃から後半の時期に位置づけられよう。また、No.10はこの中であって比



第15図　出土土器実測図

較的古式な特徴を有するものと思われ、およそ８世紀後半の産出ではなかろうかと推測するものである。

４号住居址出土遺物（No.13～22）

本住居址からは、須恵器の坏（No.13）、高台付坏（No.14）、蓋（No.15）と、土師器の長胴甕（No.16・18・19・22）、小型甕（No.17・21）、把手付鉢（No.20）である。No.13はロクロ成形で、底部はヘラケズリ後ナデによる調整が行われている。ほぼ直線的に口縁部が開き、器高が低いのに比して口径・底径の割合が高く、偏平な形態をする。No.14は底部ヘラケズリ後高台部の取り付けを行っている。No.15の蓋は、色調、焼成、胎土等でNo.14の坏との類似性が著しい。またNo.14の口径と蓋の基部径がほぼ同じであるので、坏蓋としてのセット関係の可能性が高い。No.16は甕の底部で、ふくらまずほぼ直線的に逆ハの字状に立ち上がりをみせるものである。No.18・19・22は外反する口縁が短く長胴の形態をするもので、ハケ調整後口縁部はナデが施される。No.17・21は形態的に類似性がみられるが、器面調整でNo.17は外面はハケ、口縁部と内面はナデによるものであるのに比し、No.21は、外面はヘラケズリ、口縁部と内面はハケ調整という違いがみられる。No.20は把手付の甑との見方もあり、器の残存部少ないことからもう一方の把手と底部が欠損しているため、決め手に欠ける。

これらの出土遺物は、およそ８世紀初頭の時期に位置づけられると思われる。また、このうちNo.16・18はカマド内より出土したものである。

グリット出土遺物（No.23・24・26）

No.23は、須恵器の坏で、焼成時の還元作用が不十分である橙色を帯びている。外面と底部に墨書による文字が一文字づつ書かれており、外面は逆さに「神」の文字が記され、底部の文字は解読不能である。No.24・25の須恵器の坏は木目の細かな胎土で、しっかりと焼きしめられて硬質であり、形態的にも類似性がある。また第一号住居址出土のNo.３の坏との諸特徴とほぼ一致するものである。

第Ⅳ章　まとめ

箕輪町内には数多くの遺跡が存在している。地形的には、町の中央を天竜川が南へ流れ、両側は、典型的な河岸段丘が形成されている。遺跡は大きく４つの地域に分けて見ることができる。まず竜西地区における遺跡として、経ヶ岳山塊山麓に広がる地域及び流下する小河川の両側に位置するもの。段丘先端部にベルト状に並ぶ遺跡群。低位段丘（沖積面）の遺跡、竜東段丘上の遺跡、以上４群に分けて見ることができる。

中山遺跡は竜西段丘上に並ぶ遺跡群の中の一つとして位置付けられ、本遺跡の南側には、昭和47年に発掘調査された北城遺跡がある。同遺跡は20軒以上の弥生後期住居址と、中世火葬墓群が確認された。次に中山遺跡のすぐ南側には箕輪工業高等学校の敷地である上の林遺跡がある、ここも縄文時代早期からの遺物が見られる複合遺跡で、過去４回の発掘調査を実施している。また北側には上伊那郡唯一の前方後円墳の松島王墓古墳があり、この段丘上先端部における濃厚な遺跡分布の一端を示している。

さて、本遺跡は、昭和30年代初めの統合中学校建設時において、遺跡の一部が明らかとなり、その後引き続き、遺物の調査が進められて来た。昭和57年より開始された校舎全面改築により２回の発掘調査が実施された。今回は社会体育館建設に伴う第３次の調査である。出土した遺構・遺物を見ながら所見を少し記してみたい。

１．縄文時代遺跡について

縄文時代の遺構として、はっきりとした状況は確認できなかったが、遺跡ほぼ中央部に埋甕が２個体検出されている。一つは正位でほぼ形を留めている。大きな方の他の一つは、口縁を下にし、いわゆる逆位の伏せ甕状態で発見された。箕輪における埋甕は上の林遺跡の住居址内からの発見がその主なものであったが、今回の単独状況での出土はこれまでの発見状況と異なるものである。次に土器片であるが、遺構を伴っての出土状況でなく、グリッド調査時における単発的な検出である。第13図の拓影で示したが、早期末のものが少量ではあるが見られた。これは同じ段丘上の「上の林遺跡」においても同時代の土器片が見られた。段丘上に縄文時代早期から人々の活動が始まったことを物語るものである。以後、前期・中期と引き続いて出土遺物を見ることができる。石器においても段丘上遺跡でよく見られるものばかりである。

２．奈良・平安時代について

住居址は５軒確認されたが、遺物を伴って時期がはっきりしているのは３軒である。第４号住居址は８世紀の初頭に位置づけているため奈良時代と考える。この時期の住居址が段丘上先

端部から確認されたことは、今回が初めてであろう。続いて第１号住居址は８世紀後半と考えるので、奈良時代末期ということになる。続いて第２号住居址は９世紀中ごろから後半の時代と推定する。このように半世紀ぐらいの間隔で住居址が見られるが、切れ目なく人々の生活が続いたことを物語っている。段丘上先端部の調査は今後共に機会があると思われるが、この時代の遺構が確認されたことは、今後の調査に大いに参考となる。

３．火葬墓について

奈良・平安時代の遺構のⅠ～Ⅱ層上から、火葬墓の発見があった。段丘上先端の遺跡としては過去において、北城・南城の両遺跡から同類の発見がなされており、それぞれ報告されている。今回の状況は南城遺跡から発見された状況に近いものである。

以上それぞれの部分について若干の説明をしたが、細部については検討しなければならないところが多い。

最後に発掘調査に参加ご協力下さった多くの皆様方、また報告書のまとめに努力いただいた調査員の方々に厚くお礼を申しあげます。

発掘調査者感想文

第三次中山遺跡発掘に参加して

小林信義

原始、古代、中世と私達の先祖がどの様にして来たかは興味は尽きないが、正確に理解する事はむづかしいし、ましてや考古学に取り組もうなどと気負った考えも、もうとう無いが、いつか機会があれば一度遺跡発掘に参加してみたいと思い実現したのが、三年前の第四次上の林遺跡が始まりで、今回の第三次中山遺跡発掘でで八ヶ所位手掛けることになると思う。同じ中山でも昨年は中学校プールの施設の敷地であり、今回は社会体育館の敷地で、その規模たるや前年のプールの比ではない。最初から参加を予定していたが、雑事のため初日、二日と欠席し、三日目から参加する事になった。既に平安住居址が二ヶ所と火葬墓が一ヶ所確認されていた。初仕事にと一人で火葬墓の発掘に取りかかった。慎重に掘り下げてゆく胡粉を掃いた様な真白い骨粉の中に僅かに人骨と思われる骨片とおびただしい炭とが出てくる小さな石積の上で火葬にしたらしく一面に小石が敷き詰めてあった。なんの抵抗もなく作業に従ったにもかかわらず何故かその夜夢を見てしまった。見たくない夢であった。

作業が進むうち第三住居址と重なって等間隔に並んだ四本の柱穴跡が二列合計八柱穴発見された。調査の結果平安時代の倉庫跡と確認されたが、今までにない新しい発見である。そしてその中央と思われるあたりから、当時の深鉢形土器が三個発見され、その中に一際大きく見事なものがあった。初めて目にする大きな埋甕であり、しかも何故か逆位に伏せた状態で出土した。ひび割れてこそいるが、完形品と思われるこれらの甕の使用目的は、子供の埋葬用説、貯蔵用具説、ネズミ落し説等々いくつか上げられている様ですが、どれも当を得ている様に思われる。当時としては貴重な日常用具であり、その時その時の必要に応じて使われた事であろうと、私なりに勝手に推測して居ります。この大きく、しかもひび割れた甕を、どうやって掘り上げるのかと楽しみに観察していたが、何んのことはないバラバラ事件そのものでがっかりしてしまいました。後で聞けば、大甕のため外に方法がないとの事で、これも一つの体験であった。これら出土する土器からは、土師器、須恵器と時代を追って人類の著しい進歩の跡をうかがい知る事ができるし、又、はるか昔の分厚くもろい縄文土器からは乏しい食料と厳しい自然の中で貧富の差もなく肩を寄せ合って暮らしてきたであろう遠い縄文の人々の温もりが伝わってきます。そして私の夢はこの時代の芸術家達がたぶん競いあったと思われ、私を魅了してやまないあの見事な火焔形装飾甕に巡り合い、この手で掘上げてみたいと願っております。この

発掘に先だって遺跡発掘友の会が発足になり、女性会員の入会を得て一段と充実した会に成長しました。大勢とは有り難いもので、さしも広いと思った発掘調査地域も多くの土器を始め、平安住居址五、建造物跡一、火葬墓一、と私にとっては新しい体験をしながら、まづまづの成果を上げ、予定を余して終了することができました。次回は待望久しかった源波古墳発掘であり、多くを期待しています。

中山遺跡発掘に参加して

小池久人

昭和61年秋、福与上金遺跡の発掘に参加したのがはじまりで、62年春「発掘友の会」に仲間入りさせていただいた。それで4月はじめからの中山遺跡発掘に加わった。

この中山遺跡発掘は、社会体育館建設に伴うものとのことであったが、私には殊更に興味があった。というのは、この地が昭和57年まで我家の水田であったからである。先年来の箕輪中学校校舎全面改築による校地拡張で水田を提供した。

かつて私の小学生のころはここに5反歩余の桑畑があった。私の家はその頃の農家のこととて養蚕を手広くやっていた。家の中いっぱい蚕で、それこそ寝る所もないくらい、蚕の忙しい時は人を二、三人たのんで桑とり等してもらった。私も学校へ行く合間にしっかりと手伝いをさせられた。この中山（私の家では山ノ神の畑と呼んでいた）の桑畑は、人からほめられるほどの良い桑が茂り、しかも家からほんの僅かしか離れていない畑ということで大変に便利であった。この桑畑が私の5・6年生の頃（昭和9年～11年）、西天竜開田の工事として水田に作りかえられた。近所の人々と協同で私の父を含め7、8人の人達が冬季の仕事としてこの作業を実施した。今から考えると大変な仕事で、機械力のない頃、トロッコなども使わず「もっこかつぎ」の力仕事であった。その時私の家の畑から少々土器の破片が出た様である。その翌年であったか、近くの権現様（市川一族の氏神）そばから大きな土器の甕が出た。父からその話を聞いて雪のちらつく中を見に行った。まだ掘り出したままの状態で、ほぼ完全な形で土の中に置かれてあるのにびっくりした。大きさははっきりしないが、高さ7、80糎もあった様に思う。その頃、中箕輪小学校に考古学にも造詣の深い有賀京一先生がおられ、早速と見にこられて写真もとって丁寧に運び、小学校郷土室に納めたということである。その品は箕輪高校旧校舎を木下へ移築した時、移したとも聞くがはっきりしない。多分縄文時代の土器であったろうと思うが、子供心にあれだけの土器が出土したのだから大昔の家があって人が住んでいただろ

うということはおぼろげながら感じられた。

作られた水田は地味もよく、稲もよく出来た。父は山の神の田の出来栄えのよさが自慢で田数７枚で我家の水田総面積の半分にはならなかったが、収量では５割を越えると話した。この水田も箕輪中学校新築の時（昭和30年）１反歩の田を提供し、今回５枚を提供した。何時の頃からか我家の畑としてまた水田として耕してきたところが、箕輪中学校の用地となったわけで、私も小学生の頃から耕作を手伝った記憶があるだけに感慨一入といったところである。この地が遺跡発掘の対象となり、４月はじめのテント設営、そしてグリッド設定、機械による作業、手掘りという過程の中で住居址もいくつか発見された。また火葬墓や完全に近い形での土器の出土など興味深くまた楽しいものであった。しかし予想外に住居址も少なく出土品もまた少なかった様である。

数千年の昔、この高台、中山の地に太古の民が住居を作って、時は流れ、ここに社会体育館が作られる。私の記憶にある50数年の間に、桑畑一水田一体育館用地と変転してきたのであるが、半世紀の歩みは太古の住居のあった頃よりの年数の経過の中ではほんのちょっぴりの歳月といえるのではないだろうか。

中山遺跡発掘についての所感

藤森秀男

中山遺跡第三次発掘は、昭和62年４月５日～４月30日で、所在地は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,230番地の箕輪中学校体育館建設に併う敷地の遺跡保存状態調査を主目的とした緊急発掘調査を行う。

４月９日には箕輪町教育長及び其の他の関係者に依り、中山遺跡発掘が、安全かつ厳粛に行われます様、神事が行われた。私達調査団は荘厳のうちに首を垂れた。続いて調査団結団式が行われ、藤森秀男が代表して委嘱状を受領する。何だか感極まったものなり。関係者の挨拶の中に、「どうか皆様、安全に留意して初期の目的を達成してほしい」との事、又、調査団の井上氏の発声に依り、調査の安全を願って御神酒で乾杯する。

本調査は大掛りの為、委員の数も何時もの倍の20名となる。私は何回か出動していますので一寸紹介してみます。

・60年度、高校上の林、末広（A）、落合（A）、末広（B）、落合（B）、羽場垣外、所開橋、源波。

・61年度、中山、黒尾、上金、源波。

・62年度、中学校中山、以上の調査及確認調査を行って参りました。何回参加しても学術的素養は身につかぬ現今であります。

本調査は前にも述べましたが、体育館建設に併う発掘で、中学校南側面積20アール位と相当な広さである。調査は東側より始められた。62年度は地方統一選挙の年であり、選挙管理委員の私は、会議の為休日が多く皆様に迷惑をかけました。調査も段々進む。北側は工事の為に撹乱土質で遺物は全く出土しない。東側に平安時代中期のもので4.5m四方の住居址第１号が発見せられる。発掘に当たっては何時もの通り慎重に作業が進められ、相当の日時を要した。４月は平年だと暖かい日が続くはずだが、４月13、14日は零下３度まで下がった。又調査中７～８メートルの南西の風が吹き荒れ、砂塵を巻いてすさまじい限りだった。続いて２～３号住居址も発見せられる。その頃において班単位の作業が進められた。私は４月22日第１班長を拝命する。其の任務の重大さに心を痛む。２～３号住居址は、縄文と平安との複合住居で、出土品も混合の様で、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉が多数出土する。鎌倉から室町時代の火葬墓が出土する。極めてめずらしい石を楕円形に並べ、その中に死体を焼いたもので５～20センチ程度の20数個の石が楕円形に配石され、その中より子供のものと思われる骨の一部が発見せられた。第４号住居址が発見せられ、巨大な埋がめが出土する。（第１号）埋がめは縄文時代中期、後半のものが中心で、住居址内の床面下に埋められた状態で検出された。生活における風習のひとつで、貯蔵用具説、胎盤収納説、早産死産など小供を埋葬した説が考えられるとの事。口経45センチ、器の高さ55センチもある、中央部がくびれた大きな埋がめで逆位であった。他に第２号24センチ～38センチ、３号12センチ～20センチの都合三点出土する。ほんとうに大型で完全器でめずらしかった。其の他楕円形の土坑も数ヶ所出土する。第５号住居址も最後に明瞭になる。北側より中位の土坑が表れる。住居址より多数の土器が出土する。

ここで作業日誌を二日間紹介してみよう。・４月24日は（金）晴風速８～10mの南西の風。１号住居址周溝掘。北側明瞭に８センチ幅に表われる。南側についてはあまり明瞭でないが、再度点検後形として表れる。休憩時間を利用して講習会が開かれる。縄文土器埋がめ特に石付埋がめについて其の意味１～８条、又使用目的について主体は小児遺体埋葬である。１号かまど解体１m×１m×1.5mの大きさである。内部より多量の焼土が出土する。遺物としては須恵器20センチ大１点、其の他の土器片15点。柱穴がなかなか発見できない。再度掘り割ったが発見できず中止。グリッド掘Ｌ－21～Ｍ－19～０－19より縄文土器数点出土する。其の他住居址と思わしきものは発見できなかった。・４月27日（月）曇後晴　土器集中区（第４号住居）の縄文埋がめ掘上作業。１号、２号、３号共に掘上を行う作業は慎重かつ丁寧に、１個体毎に破片のまま箱詰し復元の事。相当技術を要するであろう。土器集中区中間部の掘りを進めたが、遺物は全く発見できなかった。２～３号住居址清掃作業。５号住居址発見。１、２班合同にて発掘。柱穴明瞭。１号住居址、２～３号住居址、カマド址断面掘割り。南側中間グリッド、水

路掘割りを行ったが、一時流水したと思われる小砂利が若干見られたが、川として使用したものでない様であった。１号住居址写真撮影を終了する。以上日誌より。

４月は変転極りない月である。早春に咲くこぶし、続いてもくれん、岩山つつじ、れんぎょう、そして爛漫と咲く桜花、其の間統一地方選挙、祭典とはなやかのうちに息をつくひまもない。そんな中に於て初旬より始まり30日で中山遺跡の発掘は終わった。４月は明治23年以来の降雨量の少ない月で連日作業を行ったので初日の目的を達成したと思う。又当初心配された安全面についても何の支障もなく、皆和気のうちに進められた事が最大の喜びである。又柴氏の随時の講習会は、全員教養が身についたことと思うと感謝の念で一杯であった。最後に源波古墳に夢を走せ、筆を止める次第であります。

中山遺跡発掘に参加して

岡　正（拓人）

３月の天候不順に気をもんだのに、４月に入って天候も定まった。中学校体育館新築にともない行われる遺跡調査は、４日には準備もできて５日には試験掘に入った。中山遺跡第３次調査であり、第１次と第２次に貴重な出土品があったので今回にかける期待は大きい。４月８日神事が厳かにとり行われて、続いて調査団結団式、教育長より１人１人に委嘱状が手渡されて、いよいよ発掘調査に意欲が湧く。調査員としてはじないよう、心のひきしまる思いです。ここは原野から桑畑、そして昭和初期に水田へと変わり、時代の流れもはげしく、ローム層が破壊されているのにも驚くばかりです。

童唄流るる里や　遺跡掘り　　拓人

気候は良し、学びの舎は近し。入学児か、保育園児か、習い覚えた童唄が流れる。出土した住居址から聞こえるが如く。天候に恵まれて調査は進む。火葬墓や城居址も出土。倉庫跡とみられる柱穴がみつかり、縄文時代の埋がめが３つ、ほぼ完全な型で出土した。いくつかの住居址、倉庫跡、縄文土器、土師器、須恵器等沢山出土して、４月いっぱいで調査が無事終了できたことに感謝せざるを得ません。待たれる次の遺跡発掘に思いを寄せながら。

古　　代

小　松　敬一郎

縄文のロマンを求め今日もまた　只一筋に覆土を撓ねる。

それぞれの語りの中に得るところ　砂塵の中に発掘進む

如何なる人愛でしならむか掘りたるを
　吾手に乗せて見る一片の土器

現世(いつくよ)を如何に見つめむ幾千年
　地下より今日ぞ眠りより覚む

数百のグリッド棒に気圧されしが　今日掘り終へて心良き疲れ

骨　　灰

小　松　かほる

その紋様くきやかに見え四千年を
　地下に埋れいし縄文の土器

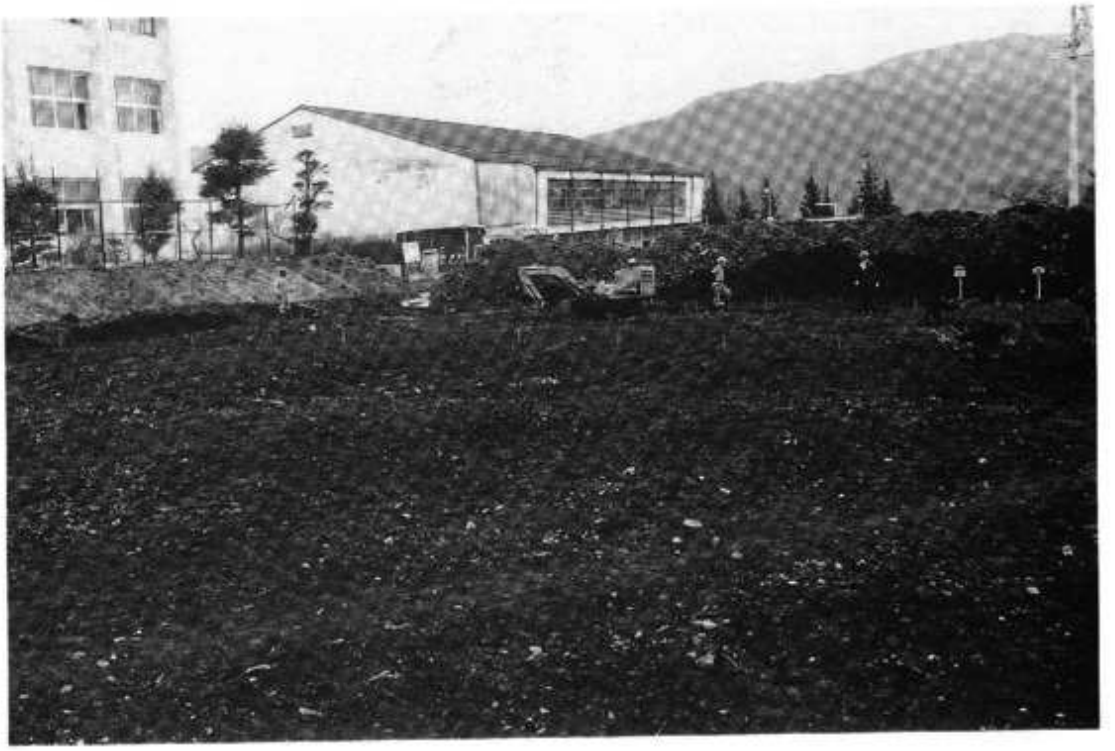
火葬場の跡とぞ焦げし石の間に　骨灰白く今に遺れり

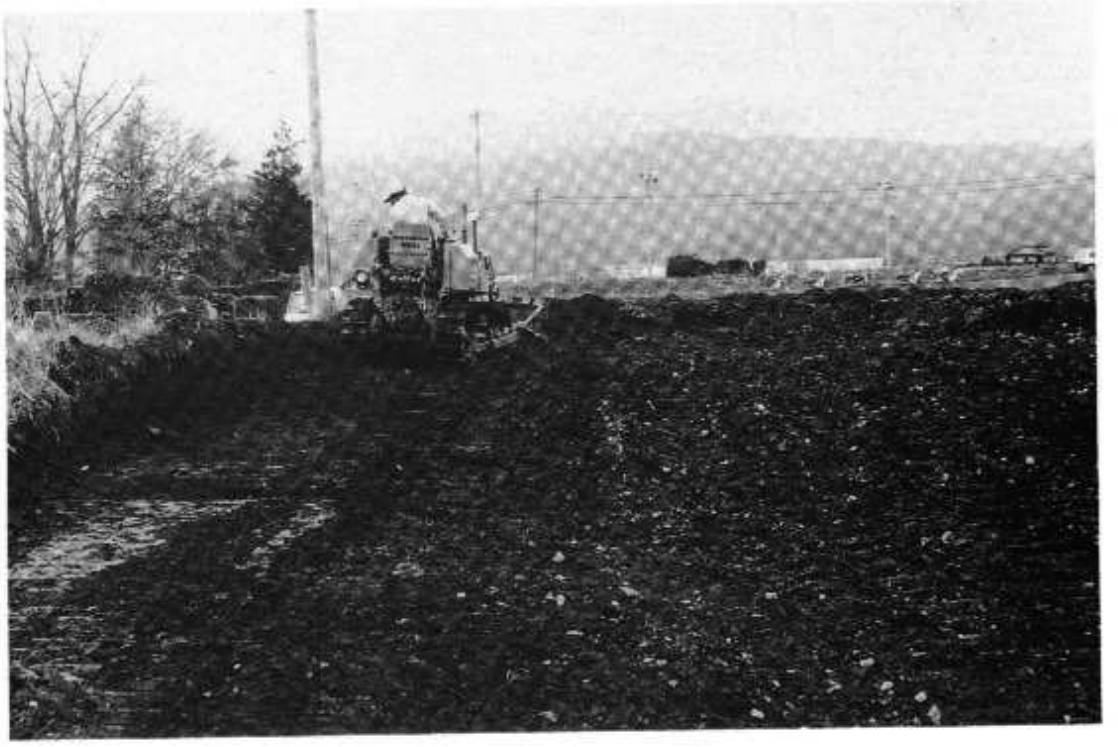
女の座どの位置ならむか出土せし　炉端に香く古代を偲ぶ

囲い人住まわせたかもとジョーク言ひ　縄文住居の柱穴探す

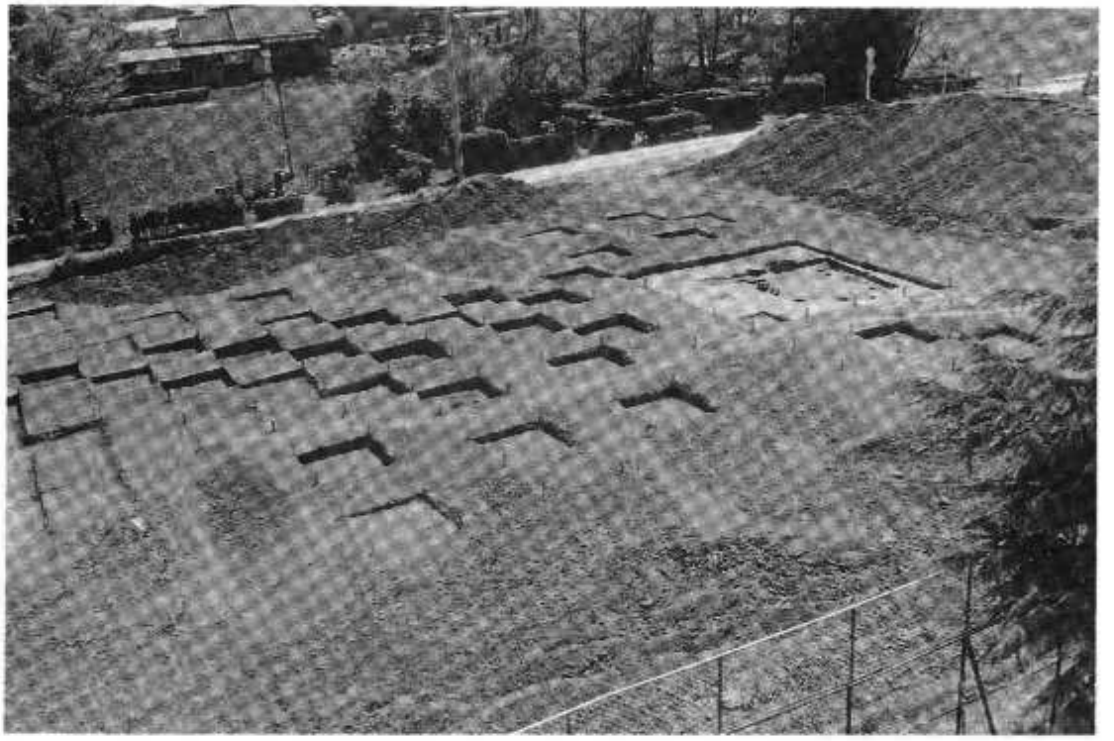
あくまでも青き空なり掘り上げし　太古の土器と現身われと

図　　版

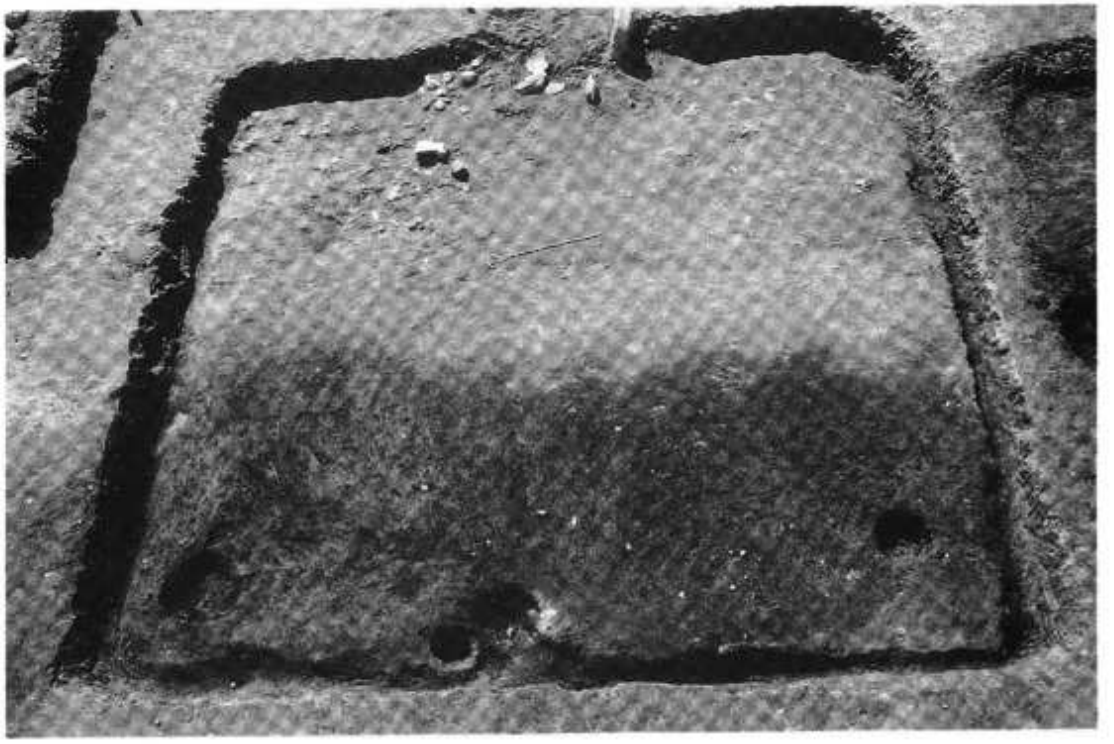


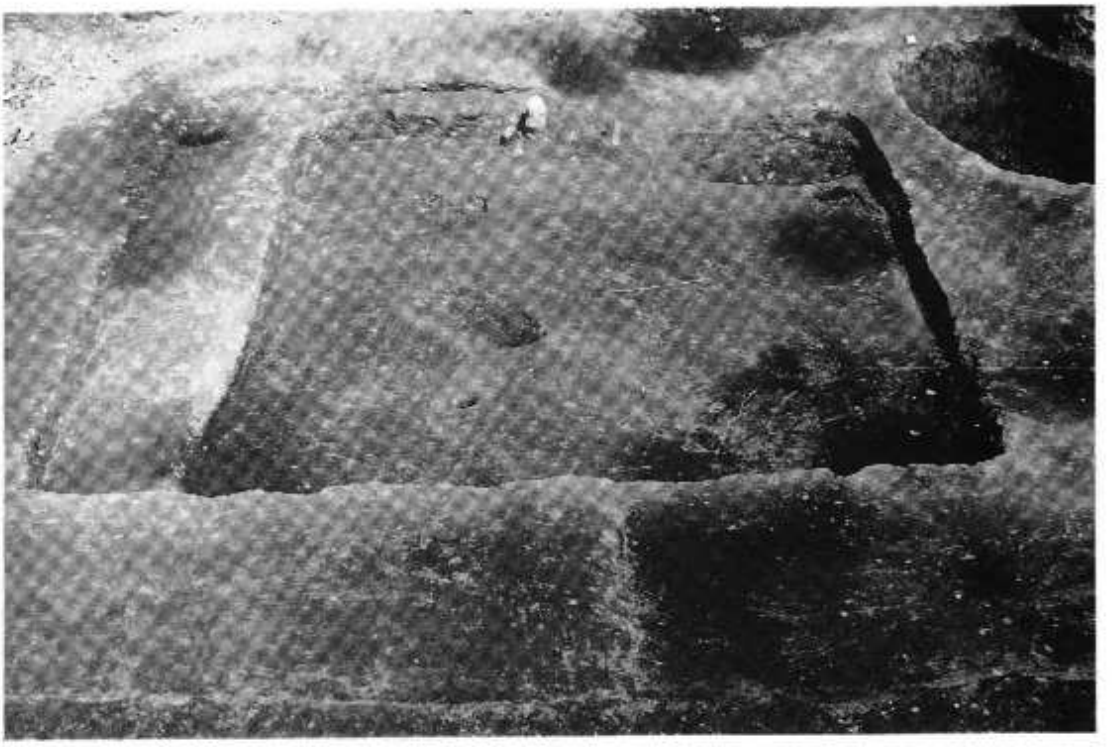


第1図版　遺跡地近影

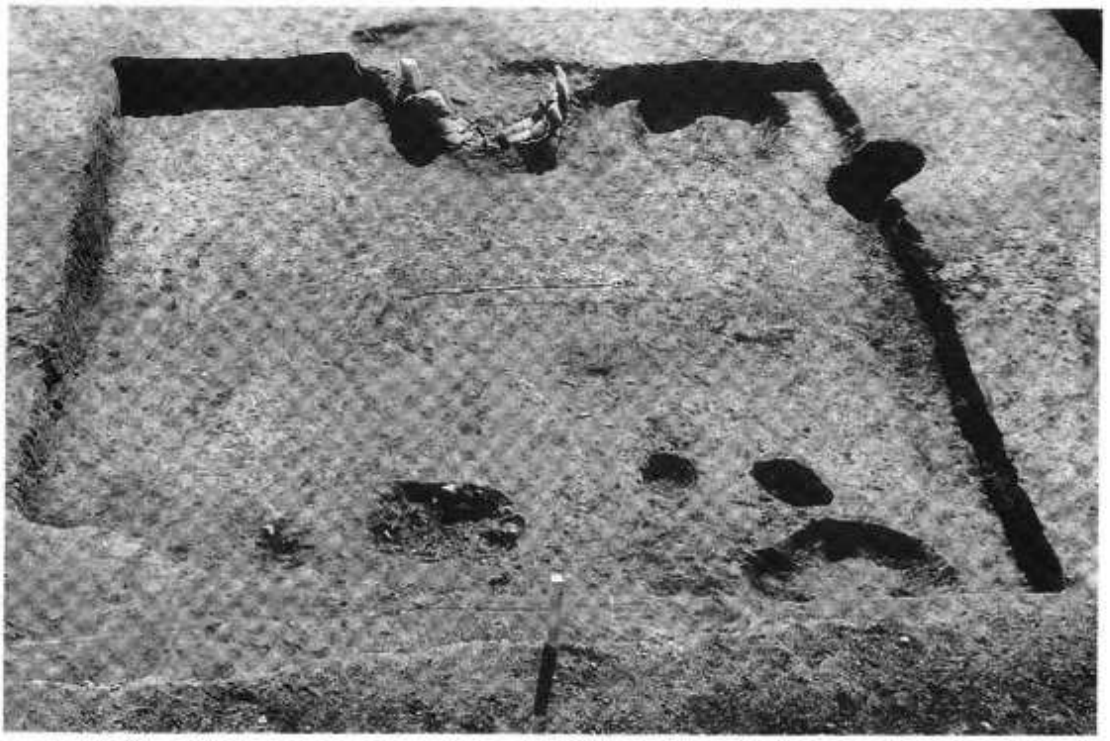


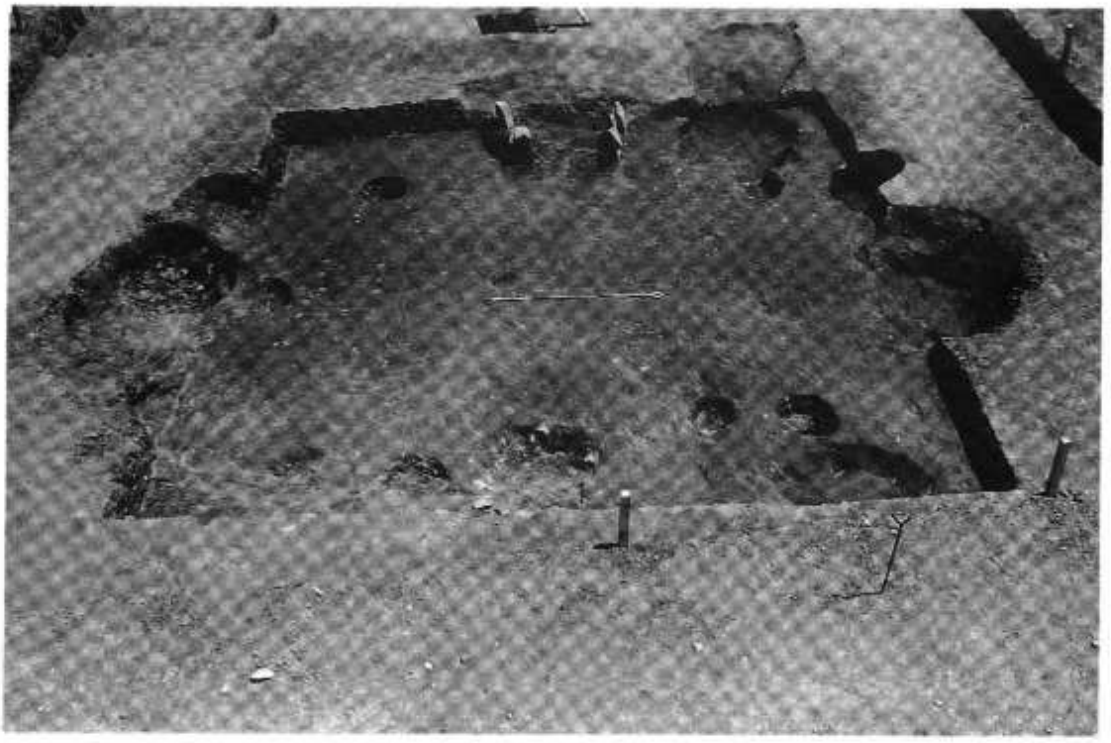
第2図版　遺跡全景



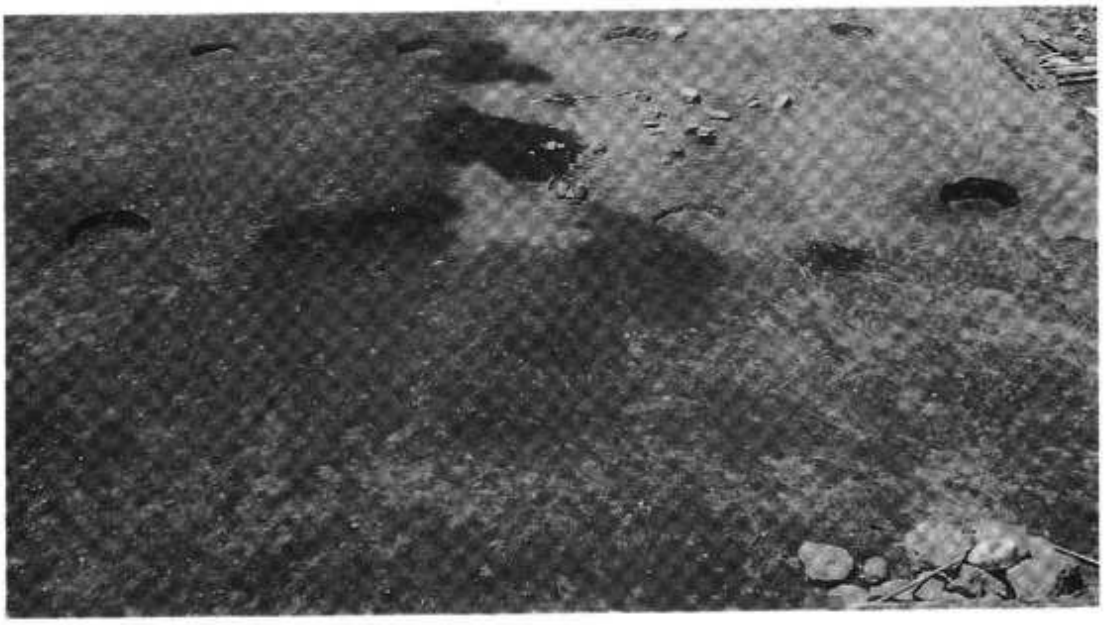


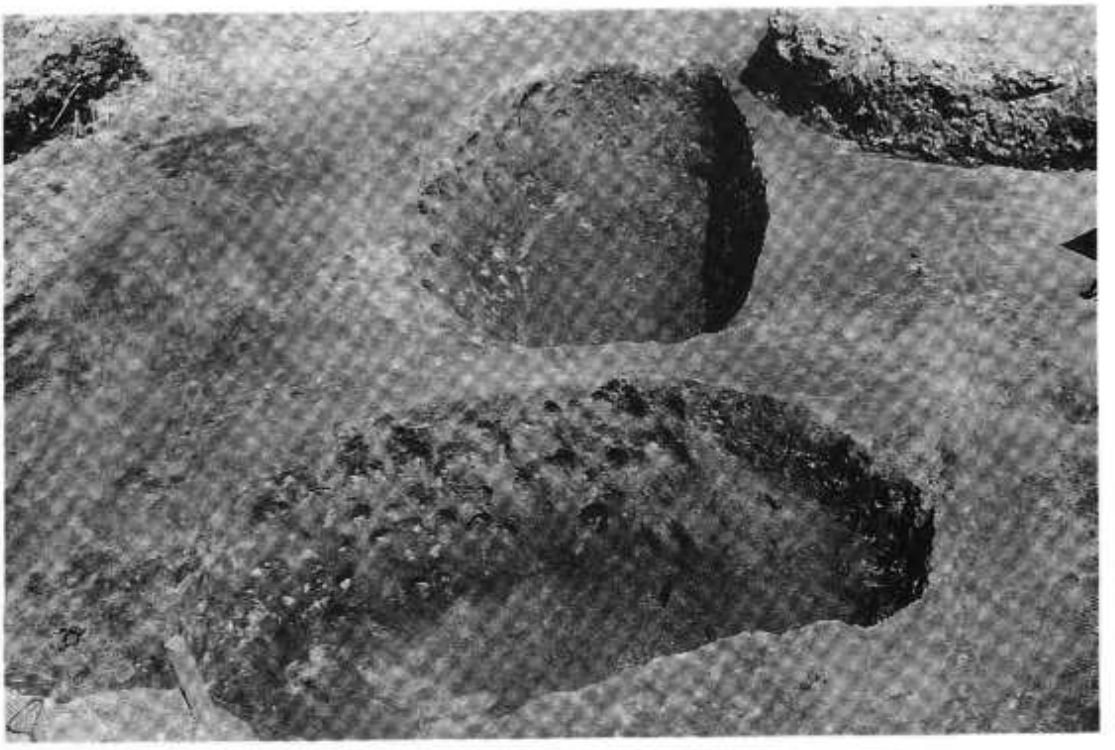
第3図版　住　居　址



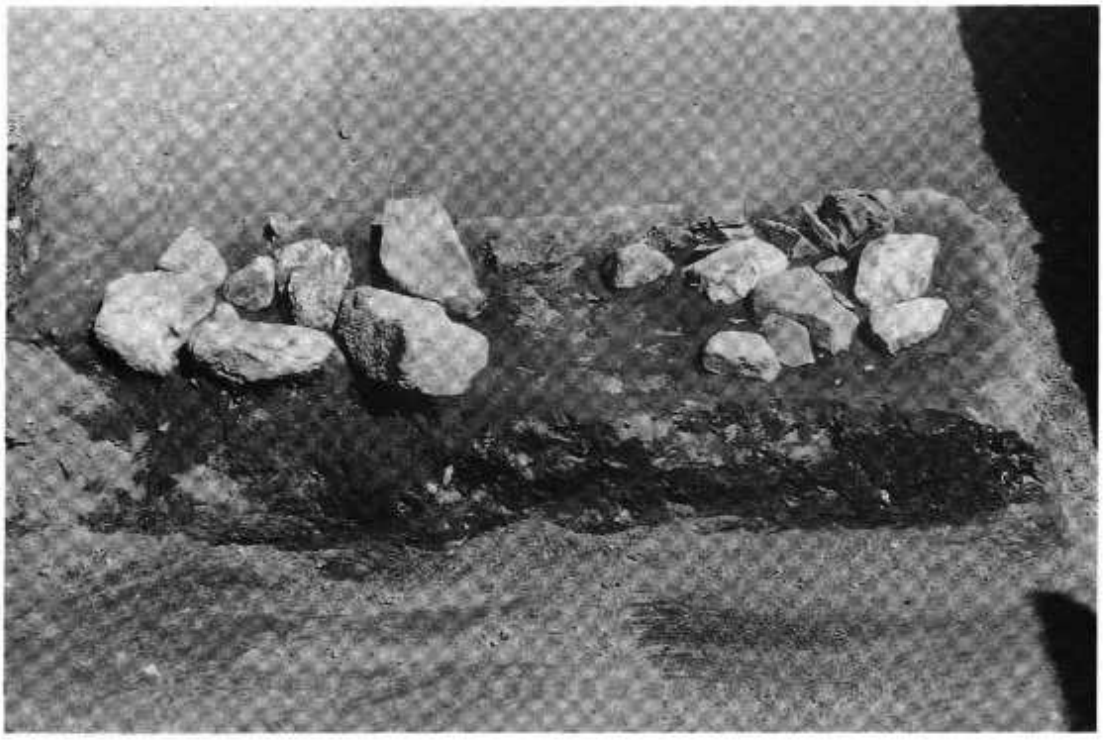


第4図版　住　居　址

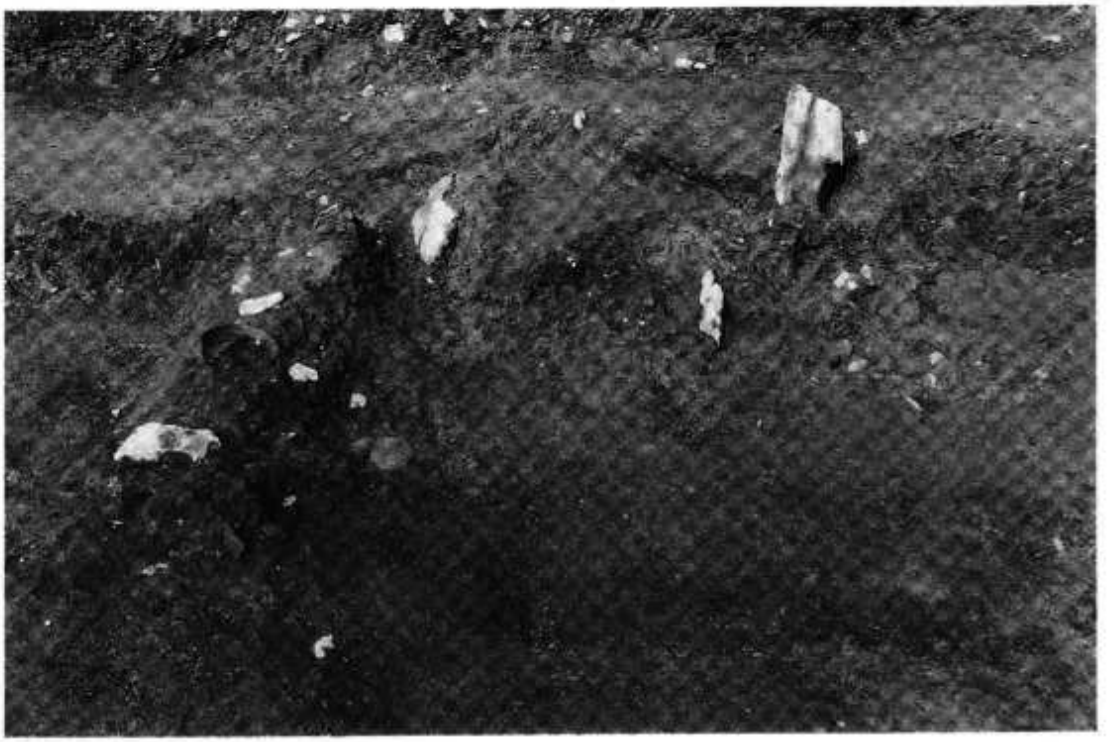




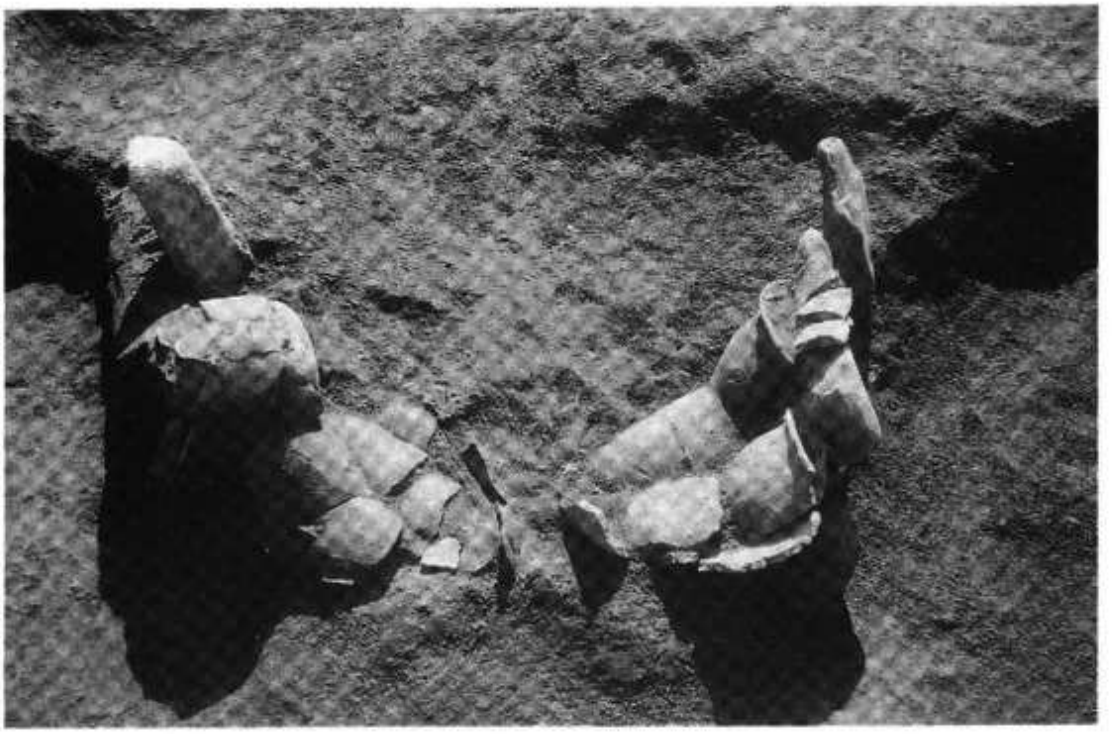
第５図版　掘立建造物址・土坑



第６図版　土層状況・火葬墓

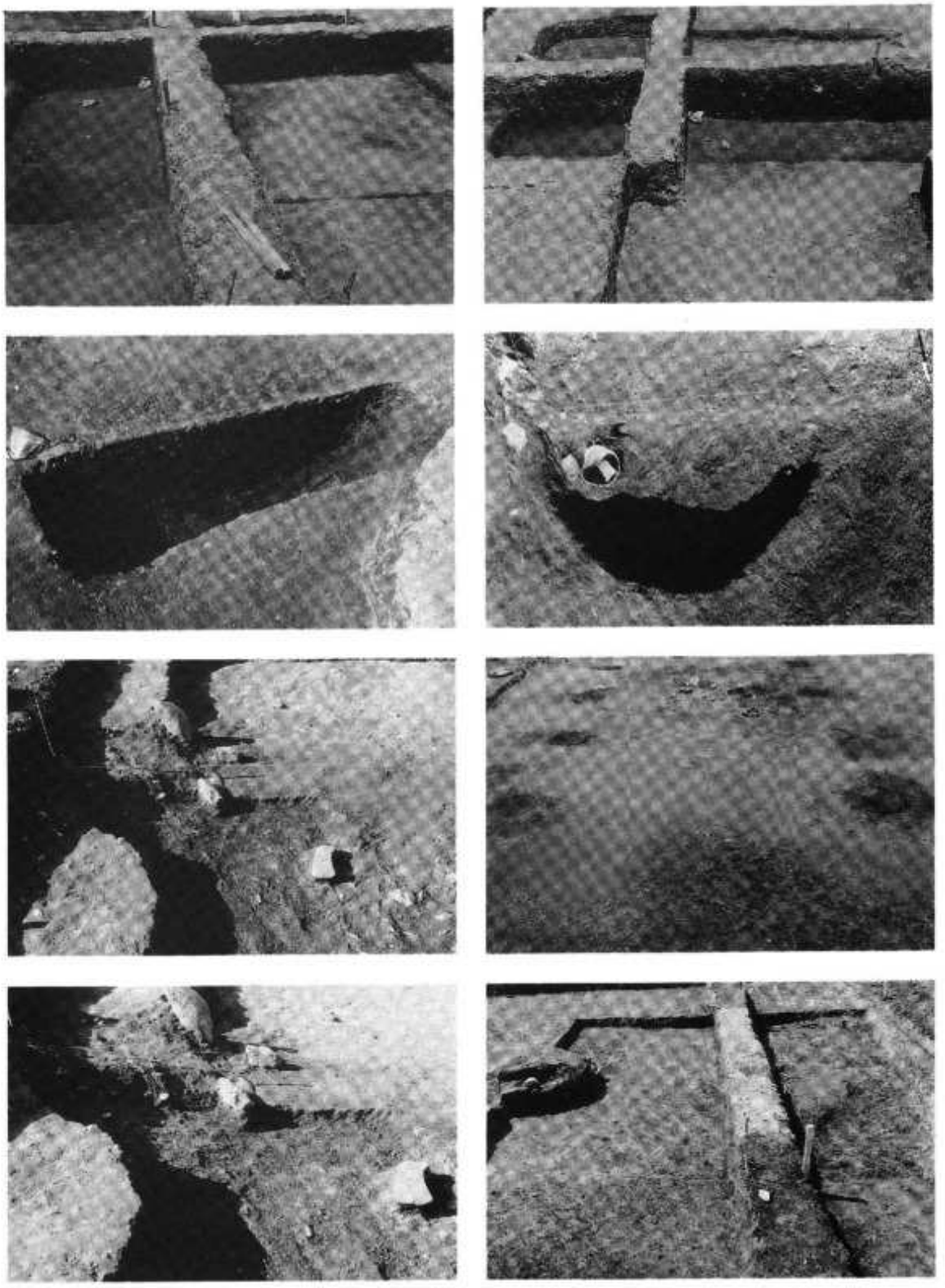


第７図版　カマド状況１



第８図版　カマド状況２

第9図版　神　　事



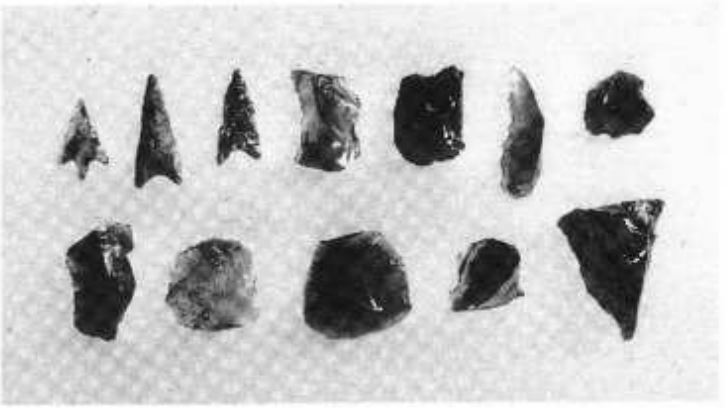
第10図版　遺 構 状 況

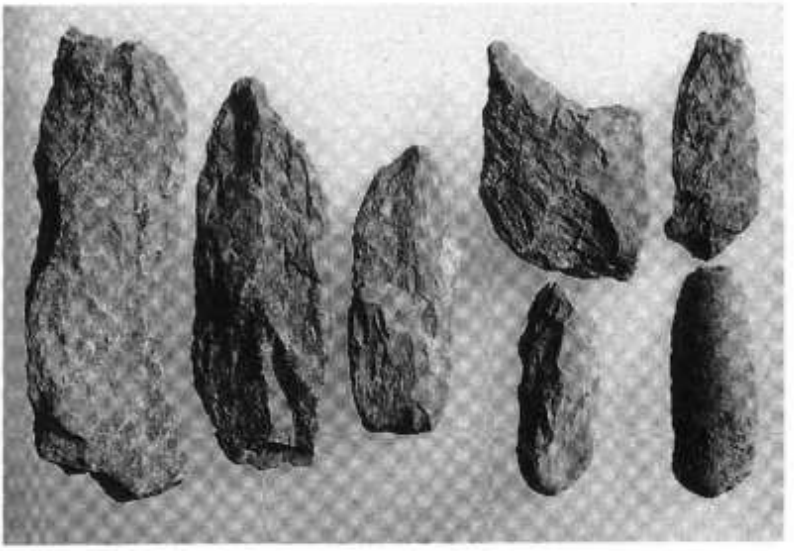
第11図版　調 査 状 況

第12図版　調 査 状 況

第13図版　遺物出土状況

第14図版　出土土器





第15図版　石器及び土器片